ハガネの蝶

有村ひつじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハガネの蝶

【Ｎコード】
Ｎ２６９６Ｍ

【作者名】
有村ひつじ

【あらすじ】
帝国『王龍』に生まれた双子の姉妹、コトリとトリコ。売られた町で出会った『キツネ』はふたりにとんでもない予言を言い渡す。ある計画の実験的な試行。コトリとトリコ。朱。そしてそれは、遙か離れた敵国シーグル最強軍、四位の世界を巻き込んでいく。存在すべてが、誰も知らない、知る必要のないキゴウ。つながる波の上に舞う蝶々も花も、風もまた、作り出したキゴウ上の幻想世界。それでも互いに唯一の羽根の休め場だった。たとえ、それが金色に狂い咲く世界の中だとしても。

1．未完成の双子

『朱』。

この国の誰もが知っている尊き言葉、尊き色、尊きもの。

けれど、わたしは『朱』を呪う。

「僕しかいないっ！ここに子供は僕しかっっ！！」

何度も叫んだのだろう枯れた声が、煌びやかに輝く華街のネオンの光に吸い込まれていった。

振り返る大人達は酒に酔ってか、それとも関わり合いになるのを敬遠してか、両方か。憐みを含めた視線を一瞬向け、それでも素通りしていった。

長い前髪はその目を隠す。

肩につくかつかないかの長さにザックリと切られた漆黒の後ろ髪も美しい童子は、小さな体を精一杯広げ、道を塞いでいる。垣間見れる顔つきはまだ幼く、けれどもしっかりとした拒絶を向けた。

いつの間にか体格の良い青年たちが童子を取り囲んでいた。

「去れ！」

強い意志の言葉もかなうはずなく、とはいえ、対向する体格の良

い青年にかなうはずもなく、片手で軽々と道の脇へ投げ捨てられる。
再度、軋み痛む体を起こし、宿った鋭い眼光を一団に向けた。
けれど、その鼻先に突きつけられた銀色の刃に唇を噛む。
無造作に投げられたときに切ったのか、口の中に生臭い血の匂いが広がった。

「いい加減にしろ、美山華街にはふたり童子が売られたことは監視官より報告がきている」
「……監視、官……」

年齢も疎らな男達が視界を塞ぐように立ちはだかり、見下ろす。
さっきまであれほど煌びやかだったネオンの光は遠いところとなり、童子の白い顔に影が落ちる。

「赤ん坊で捨てられる子は華街では多いが……」
「役人なんかにわかるものか」

『捨てられる』その言葉に童子の瞳に困惑の色が灯る。

「赤ん坊であろうと、童子になってからであろうと、捨てられたことには変わりあるまい。きてもらうぞ、童子。我々は王龍軍にお前達を連れて帰らなければいけない。それにお前……女だろう？こんな華街にいればいずれ体を売ることになるだけだ。兵として生きた方が……」
「同じことだ」

素早く言い返し、童子は顔を上げ、役人の男を睨みつけた。

「僕達は死ぬためにここにいるんじゃない」

身体に合わない大人びた答えに男達は一瞬怯む。

「お前達の勝手になるつもりなど、ない」

童子は言い切り、そして鋭い眼光を向けた。

「いましたっ！捕まえましたっ」

荒げた声が聞こえ、童子はそれを狙っていたかのように脇目もふらず、その方向へ役人の間を縫うようにして走った。

「はなせえっっ！！」

全く同じ、童子の声。

「コトリッ！」

肩に担がれ暴れる、同じ体型、同じ髪型、同じ目の色をした童子をさらに先の男達の隙間に見つけ、唇を噛んだ。

「はなせえええええっっ！！って、言ってるだろっ！！！」

その声は担がれた童子から放たれる。

「ああ、一卵性双生児。なるほど、良く似ているね」

今まで聞かなかった抑揚のない声が異質のものとして場に響く。

（違う。『わざと抑揚のない声で話している』）。

童子は背後に立った気配に振り返ろうとして、その人物に頭を固定された。

（――――――誰。）

「コトリ、は随分体力をもてあましているよう……蹴りが入ったな」

（……コトリ。）

役人の肩に担がれ、勢い良く両足をばたつかせていた『コトリ』は援軍ともいうべき、こっちを張っていた役人によってがんじがらめに取り押さえられている。余程の隙がなければ逃亡は不可能な状態だった。

「コトリはここで男達に媚びる商売をして生きるよりも、兵の方が向いてそうだなぁ」

「ここのお姐さんはそんなひとたちじゃない」

かすれた声で言う。はったりにもなにもならない。背後の男には痛くもかゆくもない言葉だ。

（――――――声色は若い感じがするけど……）。

そう判断し、童子はそれでも背中に流れた冷たい汗に緊張を走らせた。

「まあ、確かに美山は世界一、華街として誇りをもち、そして美しい場所だけどねぇ」

美山華街は王龍に多数存在する華街――――、つまり、娼婦の街のひとつだ。

色とりどりの華やかな着物はこの街へ訪れた人々を誘惑させるための道具。香りはこの世とのひとときの離別を促すために。

ちなみに、違法。

けれども取り締まれないのは、いまだ治安が揺らぐこの王龍で幼子を手放し金銭を手にしないと生きていけない人種が存在するから。王龍は全ての国民に均等に援助をするほど裕福ではない。

が、それは表向きの理由だ。

秘密裏に華街に送り込まれた王龍軍の役人、『監視官』が存在する。売られた童子を確保するために。

「短期間に行う情報処理能力はきみの方が有能のようだね」

幼いながらに、コトリの状態の方が危険ではないと身に感じる。

はるかに――――――、つまりこの背後の人物より、も。

「そして、きみは賢い。もう、抵抗は終わりかな？」

勢い良く振り返り、見上げた。

「――――――ッ！」

（――――――こ、声が……）。

喉を両手で押さえる。今までむやみやたらに叫び続けていたため、喉がやられていた。

振り返り手を差し伸べる大人なんて、この国にいるはずがないのに。

ましてや、この国一番の華街、美山には。ここは現実とかけ離れた隔離されたひとつの国に等しい。

あくまで、優雅で美しく。

王龍、美山。

この国が誇る美山華街は一歩足を踏み入れれば誰でも『非現実の世界』だ。

初めて目に涙が滲んだ。

「くやしいか」

再度、見上げたその男の顔は闇に消えていた。軍隊の人間にしては華奢な体つきだが、服装はここに売られてくる前にも何度も目にしたことがある軍服で、胸の紋章に描かれた昇る龍の刺繍も、間違いなく青年が王龍の正式な軍人であることを示していた。

だけどどこかが違う。

なにかが男からかけている。

「きみは、名は？まだ知らなかったな」

不意をつかれた問いに間をおく。

「おい、そこのっ！わたしの大切なトリコに触るんじゃないっ！！！」

この状況はさておき、とりあえずがっくりと項垂れた。

まさか片割れに状況が伝わらないとは。以心伝心、どこに行った。

「――――――トリコ」

なぜか、童子、トリコの元に聞こえたのは優しい音色だった。

「……っぷっ……まさか、片割れに暴露されるとは思わなかっただろうけど」

（――――――まったくだ）。

トリコは小刻み笑う男を簡単に見上げた。さっきまで走っていた一線が薄れているようだった。

「さて、トリコ」

そう言いながら、今までわざと闇に隠していただろう顔を近づける。

腰をかがめた、そう判断した瞬間、ネオンの光りに露になったその顔にはっと息を呑んだ。

「――――――お前、だったのか」

「思ったよりも驚かない。それはつまらないけど……きみはどこまで賢い？トリコ」

目立たないような縁の楕円の眼鏡の奥には吸い込まれるような漆黒の目。トリコの『まだ若い』という判断は決して間違えていなかった。

「……監視官はお前か」

コトリとトリコが売られた置屋にいるキヨハル姐はこの美山一の売れっ子だ。コトリとトリコはキヨハル姐の小姓としてここ数週間、ほぼ片時も離れない。華街には非現実の世界だからこそ、それに浸かりすぎてしまった故の過ちが起きる。

例えば、気に入った姐を自分のものにしようと妬み、嫉妬し、剣先を向ける愚かな者がいたり、と。

コトリとトリコの背には身丈と同じくらいの細い刀が背負われている。

誰も傷つけるわけではない。

傷つけさせないように。

トリコにとってその刃はひとりのためだけにあるのだけれど。

「トリコ」

背中まで伸びた長い漆黒の髪を一つに纏め、まだ少年ともいえる年頃、けれど、全く大人びた雰囲気を持つ彼は笑う。

甘い顔に華奢な体躯。

「トリコ。キヨハルには内緒だよ？それと、キヨハルはきみたちのことを気に入っているからね、彼女からは離れないでもらうよ」

キヨハル。

彼はにっこりと笑みを浮かべ、名を口にした。

キヨハルはほぼ毎日、この男と一緒だ。キヨハルは間違いなくこの彼より年上だけれど。

現実ではない世界にいるのだから。

姐は姉であり、恋人であるのか。

『キツネ』。

トリコは声に出さずにその名を頭に刻み付けた。

それは、名も知らない客にトリコが付けたあだ名。どこかでなにかを隠す胡散臭い様子と、眼鏡の奥にたまに見える鋭い目つきから勝手につけたが、半ばあっていたようだ。

「軍の訓練に僕達を突き出したら姐を守れない。矛盾している」

「置屋から通えばいい。きみたちには私がキヨハルを守ってあげられない時間に守ってもらわなければいけない、そのために女将がきみたちを買ったのだから」

眼鏡の奥の瞳が鋭くなる。

その顔はやはり少年ではなく。

（ああ）。

「――――――トリコッ！」

風が起きた。

キツネの顔がおもしろいように間の抜けた顔になる。

トリコは悠長に「ざまーみろ」呟いてみる。

「トリコ」

背中に触れる温かさは自分と同じもの。力も温かさに変わる。

「コトリ」

声も互いに同じ。

わたしたちは、生まれる前からひとつ、だ。

「――――――驚いたな」

短期間で声が出せるだけ、キツネはどうやら大物らしい。

『余程の隙がなければ脱出は不可能』なほどコトリはがんじがらめにされていた。

「隙はつくるからこそ隙だ。お前は何者だっ！！お前が親玉かっ！」

隣にふわりと立ったコトリはビシッと音が出そうなほど腕を伸ばし、キツネに人差し指を向けた。

（――――――コトリ、人差し指を人に向けるのは失礼だよ……今回は注意するのはやめておこう。状況が不可抗力だ）。

トリコはひとりで勝手に頷く。
わたしたちは二人でひとつ。
自力で作った相手の小さな綻びを最大限に生かし、脱出。そして片割れを羽交い絞めにしながら間をとる。
キツネは心底、驚いたように目を見開いている。

「……早い」

コトリのその判断力と処理のスピードに。
コトリが幾度となくトリコの命を救った。トリコの知恵はやがて何も言わなくてもコトリを動かした。
金属の高音が耳に届いて、トリコは隣に立つコトリを見る。
堂々と背に背負った長い刀をキツネに向けていた。
そんなときトリコは無性に自分が腹立たしくなる。同時にその才能をきっちり二分割してしまった神さまを恨みたくなる。
正義は知っているけれど、コトリが相手に刃を向けるのはあまりに純粋な感情からすぎて。

（――――――コトリはわたしのためにその刃先で誰かを傷つけてしまうかもしれない）。

止めるのは簡単だ。
そのためにトリコの背にもまた刀がある。

（――――――この刃はコトリのためだけに）。

だけど、隙をつかれたとき、トリコひとりでは対処できない。トリコは最善策を見つけるために決断スピードが鈍る自分の感覚が疎ましい。

（コトリだけは傷ついて欲しくない）。

トリコはキツネを見上げた。

最善策は。

「コトリ」

名を呼ばれて振り返ったコトリはキョトンとしていた。

刀を下げるようにと声を掛けられたのはわかったらしくさっと背中の鞘に収める。

苦笑いしながらトリコは頷き、再度、キツネを見上げた。

（コトリを守るにはわたしだけでは幼すぎるんだ。わたしもまた未熟だから。コトリはきっと……王龍に必要な人間になる。だけど、今はまだ）。

「わたしたちは王龍帝へ仕えましょう」

決心して言葉を紡ぎだすと、キツネはそうすると知っていたかのように今までで一番艶やかに微笑んだ。

「コトリ、きみはいつか王龍の片翼となるだろう。今は学びのときだ。その刃を向ける力と、向ける意味を知りなさい」

キツネはそう言って、首を傾けたコトリの頭に苦笑しながら手を置いた。

（ああ）。

トリコは不思議にキツネを見上げた。

憎い監視官であるはずの少年、キツネを。

（このひとは、もしかしたらコトリを導いてくれるのかもしれない。あるべき道へと）。

すんなりとトリコの元へ落ちてきた感情は、思いのほか憎いものではなかった。

「トリコ」

どうやらその動作は嫌だったらしく、コトリは泣きそうな顔でトリコを呼ぶ。知ってか知らずかキツネは手で軽く髪を撫ぜ、すっかりコトリがしおらしくなったのを見て笑った。

（ああ、前言撤回。絶対、わざとだ。性悪……）。

「トリコ」

そう呼ぶキツネは一層、艶やかで。

「トリコ。お前は賢い」

（お前呼ばわり……。これも絶対、わざと）。

「トリコ、お前はいつか――――――」

いい加減、キツネの楽しそうな様子に辟易してきたトリコはため息さえつきたくなる。
キツネが静かに紡ぎだした言葉に、周りを囲んでいた役人達はおろか、トリコでさえも絶句したのは言うまでも無い。

「『朱（シュ）』となるだろう」

『それはこの国で一番、尊いものの名』。

1．未完成の双子（後書き）

天井宇宙。一色素もよろしくおねがいします。

2. 両翼の龍の国

『両翼の昇り龍』。

王龍で王龍帝に仕えるという、影の腹心『阿』と『吽』。

『阿』は力を守護し。

『吽』は理を守護する。

夢物語。かのものはそう言い。けれどそれを信じて疑わないものも王龍には存在する。

たったひとつ、それは王龍の民が知っていること。

『阿』『吽』は間違いなく、紋章の昇り龍の両翼の名であるということ。

数百年前に起こった大戦で、星のオゾン層に穴が空き、その傷は現在も悪化の一途を辿っている。人類が数百年もかかって考え、造りだしたのは自分達を守る保護膜（シールド）という無色透明の物体で国全体を包み込むことだった。

保護膜内には四季があり、人工的に作り出された雲が雨を降らし、暮らす人々に定期的に恵みをもたらす。ただ、それは保護膜内での事象で、一旦、外に出てしまえば数秒で身を焦がす太陽熱が待ち受

けている。
かつて、この星に大小数百もあった国々は、数百年の間に滅亡と統合を繰り返し、砂漠の中には最終的に五つの大国家が出来上がった。
『アルファ』、『ベータ』、『ウィザード』、『シーグル』そして、『王龍』。
特異な環境の中で国々は独自の政治体系を持ち、それぞれの発展を遂げた。
『ベータ』においては『アルファ』の第二国として存在し、政は全て『アルファ』で決定された。そして、どの国もうらやむ国、『シーグル』。
『生命』という名をもつこの国は、同じように戦国でありながら、国内は平和そのもので、街には緑が芽吹き人々は笑うことを忘れてはいなかった。
彼らを支えているもの、それは全てを委ねる『ＭＯＴＨＥＲ』というコンピュータシステム。

その秘密をと、どの国もが思い、欲した。
どの国もがシーグルへと侵攻し、同時に壊滅し続けた。
そして相手の名前が囁かれ始める。

シーグルには“難攻不落の四位実継”あり、と。

そして。

四位実継の戦場には必ず“金色の蝶々”が舞う、と。

3年後、王龍『美山』。

「トリコっ！キヨ姐、トリコはどう？」

玄関から遠い奥の間でさえ認識できるほどの大声に、トリコは目を開けた。

ざっくりと肩まで切っていた漆黒の髪は背中の中ほどまで伸び、整った顔に白い肌、吸い込まれるような漆黒の目をしたトリコは、近頃、女将に、もう数年したら店に出てみないかと誘われるほどの美しい少女になっていた。

寝巻きの浴衣のはだけたところを直しながらゆっくりと体を起こす。

あどけない顔つきは3年前から変わらず、普通だったら遊び盛りのまだ小さな体は華奢で不健康なほど色白だった。

（頭が重い……）。

眉間に皺を寄せ、やはりもう一度寝なおそうと思ったところで勢いよく前方の障子が開く。

（狸寝入りでも……）。

「トリコ！」

存在を判別する間もなく、障子は高い音を立てて勢いよく閉まる。トリコの目の前からすでに開けた主は消えていた。

（……はやっ……）。

浮かんだ脂汗は体調がすこぶる悪いからで。

「風邪は治ったか！？」

同時に布団の脇には同じ姿形の少女が、すっかりしょぼくれた様子で正座をしていた。

「コトリ。大分いいです」

コロコロと笑って見せると、コトリは一つに結った髪を揺らして「よかった」頷いた。

（はぁ……単純明快、素晴らしい……）。

信用しきっているのか、コトリはトリコを疑うことを知らない。

体調は、コトリが朝方出て行ったときよりも数段悪かった。

「トリコ、今日はもちろん訓練ないんだよな？休んだよな？」

「ええ」

目の前でほっとした様子でいる双子のコトリも、口を開かずじっとしたまま、艶やかな着物でも羽織れば、トリコ同様人形のような美しい少女だ。女将もそれを残念がる。

コトリはじっとしていることができない。

今もまた、王龍軍の訓練終了後そのまま走ってきたのか、頬には土がつき、頭の上でひとつに結んだ長い髪、男子と同じ軍の身軽な衣服を纏っている。どちらかといえば少年、そんな印象が強い。

幼い頃から軍に連れて行かれても、８歳にもなれば女児はほとんどが戦いの実地へとは赴く場所に就くことはない。けれどコトリは

数少ない女児兵のひとりだ。そしてまた、部署は違えど、トリコも。
だから、二人は目立つ。
コトリは何も気にはしないが、トリコは配属された時点で奇異の視線の的だった。
たとえ、誰も話しかけてこなかったとしても。

「お帰りなさい、コトリ。今日は早かったんですね」

言葉に詰まるコトリにトリコはいつものように微笑みかける。

（すぐに答えはやってくるんでしょうが）。

廊下を走る足音にコトリはビクリと肩を上げ、足音と共に逃げ腰になる。

「コトリ、どうかしましたか？」

「……トリコ……た、たす」

震える片手をコトリが伸ばし、それをキュッと両手で握り返す。
首を傾げるとコトリの目に涙が溜まった。

「ト、トリコの……バカーーーーッ！！！！！」

「コトリッッ、お前、さっさと帰るんじゃないっっ！！！！！」

同時に響いた叫び声に、トリコは用意していた両手で、もちろん両耳を塞ぐ。

「ここにいることは、バレバレだっ！だーれーもーがーっ、知って

るんだからな。毎回毎回毎回毎回」

障子を勢いよくすべらせ、軍服を着た青年が仁王立ちをしていた。

「リ、リクオウ……今日はサボリじゃないんだっ」

弁解を言うそばからコトリは頭を抱えて蹲った。

（頭かくして尻隠さず。どちらも隠さず、は、どうなんでしょうか、コトリ……）。

「この状況を見て、どこがどうサボリじゃないと言い切れる。そもそも上司の名前を呼び捨てとはいい度胸だ」

『リクオウ』、は、すっと栗色の目を細めた。

この国では珍しい瞳と髪の色素。背に背負った二本の長剣はこの国の誰よりも長い刃先を持つ。いつも険しい顔をしている青年、リクオウは、影で少女達の憧れの的になっていることを知りもしない。

鈍い、というより女性に疎い。

周りにいる女性といったらリクオウよりも強いんだから仕方がないだろうが。

何よりも戦地が似合う青年だ、トリコは思う。

とはいえ、トリコもリクオウの部下であるコトリも戦地での姿など見たことが無い。コトリとトリコはこの戦乱の世界において、いまだ戦地へ向かうことは無かった。幸運、その一言に尽きる。

儚く命を散らすために生きてきたわけではない。

リクオウの噂はトリコのほとんど戦地とは逆の部署にも届いた。

まるで闘舞のように美しい戦いだと。二本のスラリと長い刀を身軽に操り、リクオウは戦地を駆ける。トリコはその様子を何度も思

い浮かべた。

そっと顔を上げる。

一歩踏み出したかと思うと、サラリと短い髪が揺れ、一瞬のうちにリクオウは目的人物の真後ろに立った。

（――――――速い）。

素直にトリコは見惚れ、リクオウを見つめた。

（わたしでは、ついていけないんでしょうね。だけど）。

多少の胸の痛みを振り切るようにため息をついた。そして、隣を見る。

（もしかしたら、コトリなら）。

もはや逃げも隠れも出来ないコトリと追い詰めた青年の勝負はついている。

「ばれてるから、コトリ」

冷ややかな声と共に、勝負あった。

（元々、勝負にもなってないけど……）。

リクオウは蹲って頭を隠しただけのコトリの後ろ襟を掴む。思いにふけるのを断ち切るように小さく頭を左右に振る。

「リクオウ少尉」

儚い音色が静まった置屋にすっと消えていく。

「少尉」

コトリの声だが、どこか落ち着いた声色に、リクオウは視線を動かす。錆びたブリキのこする音でも聞こえそうなほどぎこちなく。

「ト、トトトト……トリコッ！！！！」

声が上ずっているがトリコは気にしない。トリコにしてみれば久しぶりにリクオウと話が出来る機会だった。

「リクオウ少尉、いつもコトリがすみません。でもしからないでやってくださいね。コトリはわたしが朝から熱が高かったので心配してくれたんです。怒るなら、熱を出してしまったわたしを」

トリコがしょんぼりと言ってるそばから、リクオウのどちらかといえばクールな顔が真っ赤になっていく。

「少尉？」

「いっっっ、あのっ、女性の寝所に勝手に入ってしまい……も、申し訳ございませんっ！！」

コトリの後ろ襟を引っ張って即座に走ると、来たとき同様リクオウは障子を勢いよく閉めた。

リクオウが引っ張った際にコトリの口から潰れるような鈍い声が聞こえた気がしたが、あえて二人は気にしない。

様子を伺っていると障子が顔が判別できる程度に開く。

「ト、トリコ。お、お体お大事に。あのっ、コトリは私が責任もって軍部に連れ戻しますので。では、失礼っ」

「トリコのバカあああああっ！」

「おふたりとも、いってらっしゃいませ」

軽く手を振って恨めしそうな涙目のコトリを送り出す。

今度こそ廊下にひとりの足音と何かを引き摺る音が遠ざかっていき、トリコは笑顔を止めた。

「女性の寝所、だそうですけれど？」

誰に言うでもなく、ため息混じりに言い、布団から抜け出す。

鈍い痛みが頭の中を走り、トリコは目を細めた。

拍子に貧血かくらりとしたところを力強く大きな手によって肩を抱かれる。振り返らなくてもわかる気配にトリコは苦虫を噛み潰したような顔をする。

「トリコ。今更だろう？お前の寝巻きで乱れる姿も、風呂場だって」

「勝手に入ってくるからそういうことになるんです」

「そもそもおこちゃまだけど」

「おこちゃまの部屋に入るあなたが悪いかと」

抑揚のない声で言って、からかっているとしか思えない背後の男に振り返る。

「キツネ」

いつもキヨハルのところへやってくる浴衣に似た普段着とは違って、今日は胸に王龍軍の紋が入る上着を羽織っている。つまり、軍の制服で、きちんと長く線の細い黒髪を一つに纏め、キツネは眼鏡の奥で鋭い視線を向けながら微笑んでいた。

3年前から変わらない突き刺すような冷たい視線を向けて。

それでも、トリコはそれが他人に向けるより自分に向けるものが柔らかいことを知っている。

あどけなさを残す少年から、青年へ。冷たさを併せ持つ『キツネ』は3年前から間違いなく大人に成長した。

（――――――たとえ）。

再度、破滅的なため息をつきたくなった。キツネの用務はすでに知っている。

「相変わらず、だなぁ……リクオウにはあんなに可憐で薄幸な乙女なのに」

（その成長が間違った方向と思われようとも）。

『キツネ』にはそれが必要な環境にいるのだと、トリコは思う。

そしてそれに干渉する資格は自分にはないとも思う。

あれから、3年。

『キツネ』と、その、『シュ』の関係は何も変わってはいない。

「そうですか？あなたに向ける顔としては上出来だと思いますけど」
コロコロと笑う。漆黒の長い黒髪が揺れた。
簡単に締めていた腰紐をスルスルとほどくと、さすがのキツネも体の向きを変えた。
「外で待つ」
「最初からそうしてください。それと、前もって言っていただければ、わざわざご足労いただかなくても出頭いたします」
キヨハルのお下がりの絹の上着をそろりと肩から落とすと、滑らかな音が畳に被さった。絹の上着なんてキヨハルのお気に入りだからこそ手に入れられるものであって、この国の上流層と呼ばれる一握りの人間達しか手に入れることはできない。
軍に務める兵でさえ、給金はすずめの涙ほどで、日々の慎ましい暮らしが精一杯だ。
それでも。
「わたしがお前を迎えに来るのは逃亡されないように、だ」
慎ましくても家族団欒。
素晴らしいじゃないか、トリコはいつも街に出ると下を向いた。コトリ以外の温かさに触れないように。
王龍に大小６２ある街。美山は王龍の首都『王龍』を含めた五大都市の内のひとつだ。
華街でありながら五大都市に名を連ねる理由をトリコは身をもって知った。

監視官の力。目の前にふらりとほぼ毎日現れる『キツネ』は、この美山へ派遣された監視官だ。取り締まりは表向き、裏事情で彼は軍に美山華街に売られた子供達を送り込んでいる。
美山には王龍軍が所有する育成施設がある。トリコには、その施設の巨大さから王龍軍がこの施設にどれだけ力を注いでいるか一目瞭然だった。

『キツネ』は王龍で力を持っている。

それがトリコの下した結論だ。
ここ十数年、民の前にその姿を現すことのなくなった、この帝国と同じ名を持つ、この帝国の主。

『王龍帝』が治める、この王龍で、相当な力を。

まだ成人したばかりの２０歳の青年は。

（もしかしたら）。

その考えは口にするには至らないけれど。それは、トリコごときが口にするにはあまりに尊いもので。
王龍で王龍帝に仕えるという、二人の影の腹心『阿』と『吽』。
『阿』は力を守護し。
『吽』は理を守護する。
『阿』『吽』は王龍の紋章、昇り龍の両翼に現されているくらいだ。それでも歴史上、常に王龍帝を補佐してきたはずの『阿』『吽』は一度も姿を見せることも、してきただろう数々の業績を称えられることもなかった。
夢物語のようなものだと悪態を吐くものも、それを信じて疑わないものも王龍には存在する。

けれど、『阿』『吽』の存在は間違いなく、紋章『昇り龍』の『両翼』の『名』だと、それは王龍の全ての民が疑いもしない真実だ。

だからこそ、トリコは思う。

『阿』『吽』は存在し、そして。

『キツネ』は現王龍帝に仕える『吽』ではないかと。

トリコは次の言葉を興味なさそうに待つキツネを見上げた。

（笑い飛ばされて後々まで言われ続けるか、なかったことにされるか……言わないほうが身のため）。

いつものように言葉を飲み込んだ。

「そんなことしません。コトリを人質に捕られているんですから」

箪笥の中からコトリが着ていた物と同じ軍支給の白衣を取り出す。するりと袖を通した上着には、昇り龍の紋章が刺繍されていた。

「あれは、あれで楽しそうだが」

「コトリは少尉に憧れていますから」

「うらやましいか？」

珍しくキツネが会話を持ちかけてくる。不思議に思いながらもトリコはそれに応じた。

「あなたも、コトリのように可愛らしい娘が相手であればよかった

のにとでもお思いなんでしょう」

体調が悪くても拒否権は無い。

仕方なく枕元にあった古い書を数冊腕に抱えた。片手で、スラリと長い刀を背負う。小柄なトリコの背に背負われる格好でトリコはあまり好きではないが、軍へ入る際はこの格好をしなければいけない。王龍軍に反感を持つ人間達は少なくない。自分で自分の身を守らなければ、訓練生に等しいトリコ達は誰に守ってもらうこともできず、命を落とすことになる。

「お前は美しい」

（また、戯……）。

間を置いて。

「……――――――、っは！？」

まじまじとキツネを見上げた。珍しく真面目な表情だ。

「だが、お前が惑わすのはこの美しく空ろな美山という世界ではない」

キツネが真面目に言う大抵のことは、どちらかといえばトリコにとって不可解な言葉だけで。

「お前が惑わさなければいけないのは」

（キツネがまたおかしなことを……）。

できれば、その結論が飛び出す前にキツネの口を塞いでしまいたい。
コトリとリクオウの速さをこれほど恨めしく思ったことは無い。
「トリコ、聞け」
「……できれば返事をしたくないんですけど」
瞬間、キツネは不敵に笑った。
ああ。
トリコは激しい頭痛に眉間を押さえる。
「お前が惑わすのはこの世界で誰も知ることの無い、知ることのできない世界だ。お前にしか見ることのできない世界」
キツネはトリコが見る中で久しぶりに楽しそうに微笑んだ。
「……またひとに苦行を押し付ける気なんですか」
無論、キツネにトリコの非難の呟きは聞こえない。

3．世界のセカイ

『セカイ』。

同じ世界にいながらも、それはひとつではなくて。

『セカイ』。

同じことを望んでいなくても、きみを待っている。

真実の名をもって。

薄暗い、というよりも意図的に相手の判別がつかないほどに暗くされた部屋に、一本の蝋燭の火が灯った。物音なく、けれど炎が左右に揺れる。

『同志よ』

どこからか声がして、そして一呼吸も置かずに数色の声が揃った。

『朱の元に集まりし、同志たちよ』

『我々はこの後に大切な方と会わなければならない。進めるとしよう』

急かす低い声とは反対側へ蝋燭の火が動く。誰かに次の言葉を譲ったようだった。

『――――――シーグルの「声」が死んだ』

はっと息を飲む音が周囲からいくつも聞こえた。

『なに！？ということは……』

『そうだ。我々の計画は無駄ではなかったことが証明されるときが来た』

『今回の声は随分、寿命が短かったようだな』

『そのおかげで我々はこの計画を進めることが出来るというものだ。感謝、しなければな』

『このタイミングばかりはどうしようもない。これは我々の手出しできる範囲を超えている。さて――』

蝋燭の火が中央で押しつぶされるように横に広がった。

『あれの準備はどうなっている』

『ええ』

少し高音の返事はそのまま次の言葉を紡ぎだした。

『シーグルから盗み出したほんの一握りの情報を元に、最終段階までこぎつけましたよ。さすがのわたしも今回ばかりはてこずりまし

たよ、まったく』

今までで一番若い男の軽い声が、部屋に満たされる。

『ふん。あれだけ豪語しておきながら、結局、まだ終わっていないのか』

明らかな反論と嘲り笑うような声色に、怒気を纏った空気が暗い部屋に流れた。

『自分じゃこの記号の意味もわからないからと泣きついてきたのは、どこのどなたでしたっけ、ね』

『元からそれはお前の仕事だろう』

『――――っ、な！』

『いい加減にしないか』

一触即発、そんな空気を見事にその声は打ち消した。今まで一度も発言しなかった5番目の声。低く、そして沈着で、威圧感を含んでいた。

『アルファはすでにシーグル侵攻への準備を始めたそうだ』

『ふん、血気盛んな奴らばかりだからな。野蛮な』

『我々もすぐに行動を開始しなければならぬ』

一旦、間を置き、やはり五番目の声が沈静するように部屋に滞留した。

『それで、それは使えるんだろうな』

『――――は、最終段階まできております』

打って変わったその態度に舌打ちをする音。一瞥するような鋭い視線だけを残し、言葉は五番目の男へ向けて発せられた。

『つまり』

蝋燭の炎が膨らみ大きく揺らいだ。

『あとは、対象者を選りすぐるだけ、ということです』

再度、はっと息を呑む音だけが部屋に聞こえた。若い男の言葉に誰も声を発せず、ただ蝋燭の炎が左右に大きく揺らぎ続けていた。

暗い部屋に誰のかもわからない衣擦れの音が響く。

『始めるとしようか』

その言葉だけがすでにも抜けのからとなった部屋に、残照のように残っていた。

目の前には広大な土地にもったいなく余裕をとりつつ建てられた、王龍きっての施設、要塞がある。

「相変わらず、無駄な」

ため息をつくように、つい声に出してしまった言葉は取り消されなかった。

「そう言ったらお仕舞いだなぁ。トリコ。もう少し可愛らしく言葉を使ったらどうだ？まあ、それでも昔よりはマシだけど」

不変の表情でキツネはさっさと目的地へ向かって、屋外練習場の隅を進む。その真横をトリコは眉間に皺を寄せながら歩いていた。つい、ため息の変わりに吐いてしまった言葉はトリコにとって別にどうでもいいことだ。ただ、この状況に屈折した感情が膨らんだだけのこと。

「はああ」今度は間違いなくため息をついてやった。

（まったく）。

キツネは、この要塞に入ったときから、会う人会う人に頭を垂れさせ続けていた。

（キツネが何者かを調べる方がいいかな……）。

さすがにこの頃、トリコもそう思うほど多くなってきた。そして

それを思うほど、隣で飄々と歩くキツネが疎ましい。

「キツネももう少し愛想を振りまいたらどうなんです。振りまかないまでも視線を合わせるとか、キツネ。聞いてますか」

（――――――なにも、彼ら全てを無視、しなくても）。

なんとなく相手がかわいそうに思えてくる。そもそもキツネと自分は関係ないのに、気が重く、自分がいたたまれなくなってくる。

「関係ない」

（まったく、この人はどういう風に育てられたんだか……）。

がっくりと肩を落とし、トリコはその話題を捨てる。これ以上何を言っても、負けること間違いなしだ。

『身分、身元不明の多分偉い人、キツネ（いまだ仮称）』――――は、口論に持ち込むのも不可能なほど、バッサリアッサリ、ひとたまりもなく話題にしたくない話題を切捨て、ときには無視を決め込む。身にしみたトリコはさっさと引くが、たまにそれを知らない『キツネの餌食』たちは、まさしく餌食になり、立ち直れないほどのダメージを数秒で受けて道端に捨てられていく。もはやトリコに出来ることは、餌食にならないこと、だけだ。

相手に『餌食になりますよ、気をつけてください』まで言うのも面倒なので、トリコはいつもその状況をみてはため息をついた。

「余計なこと考えてると、老けるよ」

「――――それこそ余計なお世話です。あ、本を返してきます。さき

――――」

「ここで待ってるから」

提案する前に答えが出る。

「……子供じゃないんで、さすがに何年も通った部屋くらいひとりで行けますけど。ちなみに、この施設の中に入っておきながら逃げようとは思いませんよ」

長文で文句を並べると、振り返ったキツネの綺麗な顔と眼鏡の奥の切れ長の目が美しく微笑む。

「お前の行く場所なんてキヨハルのところしかないからね、コトリの妹さん」

妥協の無い脅し。

トリコは思ったとおりの反応に、せめてもの反論がてら、キツネの前でしっかりとため息をつき、書物庫の扉へと足を向けた。

（どうせ、せせら笑ってるんだろうなぁ――――、ああ、見なかったことにされたかも……）。

指紋認証、そして。

「第６７部隊、トリコ。入室許可を求めます」

『ダイロクジュウナナブタイ、トリコ。ニュウシツキョカ』

声紋認証。

軽く電子錠の外れる音がして、トリコはいつものように足を踏み出した。トリコは眉間に皺を寄せながら、書物を管理する巫女の元へと向かった。

トリコを月に何度かひどい頭痛が襲った。

キツネに言ったところ、珍しく表情を変えて、即座検査へと回された。出された結論は、『病名ナシ』。医術の発達した王龍の医療機関であっても、その結論は出なかった。今までにありとあらゆる薬を飲まされてきたが、よくも悪くもならず、一日嘔吐を伴うような激しい頭痛を耐えながら過ごすしかなかった。経験から、明日はよくなっていると知っていなければ、とても耐えられるものではない。

「はあ……」

考えることも億劫になるほどの頭痛。

ひんやりと冷房の入った静かな書庫が、少なくともトリコを安堵に包ませた。

「トリコちゃん、頭痛？」

柔らかい声に顔を上げると、優しく笑う青年が持っていた分厚い書物をさっさと引き取った。

「あ、ありがとうございます。ソウマさん」

「いいえ。少し掛けてたら？」

そう言って、さっさと木の椅子をトリコの背後に用意する。トリコも急に力が抜けたかのように座った。

「ふう……」

要塞のような訓練施設の片隅に別に建てられた『書物庫』。

書物庫には、首都王龍のこの世界最大を誇るといわれる書物管理棟にさえ入りきらなかった貴重な文献が多数、厳重な管理のもと保存されている。元々、多数の知を誇る国々が結集した、王龍はとにかく文献が多い。一つの歴史に対し、関わった全ての側から執筆された本が蔵書されている。数百、数千ページあるものから数ページのおまけのような薄い冊子までが、データ管理され、それでもその原本となったその一冊は全て、指紋認証から庫内一冊一冊の盗難防止のセキュリティーまで、王龍の最先端技術が駆使された書物庫。

そして。

そこを管理する最終砦の青年、『ソウマ』。

キツネと変わらない年頃のようだが、ソウマは正反対のように誰にでも優しい。

「大丈夫？顔色、悪いけど……」

（……それでも、王龍でも大切な書物を扱う分室を任されているくらいだから、役職も……そもそも腕が立つんだろうなぁ……見てる限りだと戦いとは無縁みたいだけれど……）。

トリコはぼんやりとソウマを見上げる。

「トリコちゃん。そんなに見つめられたら穴が空いちゃうから」

（うっ……か、かわいい……）。

２０歳ほどの青年に似合う単語でもないと思うが、トリコは頬を染める。

柔らかそうな髪、どちらかといえば丸顔でやはりキツネとは正反対。ふわりとした口調も柔らかな笑顔も、ここを守る為の王龍紋がついた白衣も、とにかく似合う。

「トリコちゃん？」

トリコが王龍軍に来て初めて話した人物で。

初めて心を許した人物で。

「少し、元気になりました」

するりと言うと、ソウマは「うん、よかった」朗らかに微笑む。

「６７訓練はこれから？」

何も言わないのに、手元に差し出されたのはいつものお茶だった。ジャスミンのやすらぐ香りがトリコを包む。受け取り、そっと一口。

「はい」

「全く、体調が悪いときは休ませてあげたいよ」

自分のことのように怒るのは、ソウマもまた『指導教官』の一人だから。

「仕方がありません。一刻を争う、訓練なんでしょうから。大丈夫です」

「『キツネ』は今日も？」

「はい。外に」

いつの間にか、口をすべらせた一回だけなのに、ソウマは外の人物を『キツネ』と呼ぶようになっていた。本当のキツネの姿はさすがに知っているだろうに、ソウマはトリコが『キツネ』と呼んでも怒らなかった。むしろ、笑い転げたぐらいだ。

「阿吽のごとく」

（え）。

ソウマは屈託のない笑顔を向けたままだった。トリコは一瞬、目を丸め動きを止めたが、ソウマの様子を確認してすぐに切り替えした。

「狛犬の方が身元確かです」

「あはははは」

トリコはそっと一息つくと、立ち上がった。ひとつに結った長い髪が背中で踊り、頭を下げた。

「ごちそうさまでした」

「どういたしまして。アルファの歴史書はまだ続きがあるけど、どうする？用意しておこうか。あとは……トリコちゃん、寝ないで読んでるんじゃないよね？」

真剣なソウマにトリコはコロコロと笑い返す。

「そんな余裕はありません。夜はキヨハル姐とコトリとキツネのお世話がありますから」

「まったく。みんなトリコちゃんに甘えすぎ」

「いいんですよ。……とくに、コトリは」

身勝手な言い訳をつけ、コトリを特異な世界に巻き込んでしまった。３年前、あの場所から二人だったら逃げ出せたかもしれない。

王龍の片翼に。

キツネが口にしたその言葉を、一度、トリコもまた思ったことがあった。

王龍の片翼を。

（――――――コトリ）。

自分は何ももたないから。

だけど。

コトリは。

だからこそ、同じ言葉を口にしたキツネから逃げたくなかった。

もしかしたら。

（ごめんね、コトリ）。

「トリコちゃん？」

ソウマの声が耳に届き、トリコは小さく首を横に振る。

（これは、過去のこと）。

自分には振り返ることは許されない。

だから、コトリを守る、何からも。そう誓った。

誓ったはずなのに何度も振り返ろうとしてしまう自分の弱さに拳を強く握り締めた。

（力が欲しい）。

トリコは何も無かったかのように顔を上げると、ソウマを見上げた。

「いいえ。ただ、キツネがちゃんと仕事をしているのか不思議でなりません」

「何か企むのが私事で仕事なんだよ、それより、そろそろ……」

「はっ……失礼しますっ！」

パタパタと音を立て慌てて走り去っていくトリコの背中に、ソウマは手を振る。

「いってらっしゃい」

聞こえないと知っていて。

振り返らないとわかっていて。

衣の擦れる音が、ひやりとした空間に響く。

拳と手のひらを愛おしそうに当てる。

そっと膝を崩し、頭を垂れた。

「――――――朱」

「キツネ！遅くなりました」

一応、もてるかぎりの全力疾走と演技力でトリコは書物庫を飛び出した。

「残念だったなぁ……もう少しでコトリと同じ部隊に入れたのに」

書物庫出てすぐの壁に寄りかかって、キツネは抑揚のない声で言う。分かれたときとかわらない態度で、キツネはそこにいた。

「え？」

（ああ、間違えた）。

企み顔で。

「珍しいな、引っかかってくるの」

（はっ……しまった……身元不明の軍人め……）。

それはもう『退屈してました』とわざと滲み出した表情でキツネは両手を伸ばすと、欠伸をひとつ。

（だから待たなくていいって言ったのに……）。

「しかし、もっと嬉しそうな顔するかと思ったんだけどな」

トリコはそれには答えず、軽くなった体を目的地へとさっさと向ける。

「どちらかというと『迷惑』？」

「キツネ、いい加減ひとの表情を読むの、やめてください」

数歩先で振り返ると、キツネは首を傾げ、本当に不思議そうな表情でトリコを見ていた。

「リクオウと同じ部隊だから嬉しがると思ったんだが」

（……っ、このひとは……）。

「リクオウは随分人気があると聞いたんだけど。どこかのお嬢さんも随分な乙女っぷ――――」

「リクオウ少尉の部隊にわたしなんかが入ったら足手まといの他ありませんよ」

「共に競い合うという――――」

「コトリではありません」

「知ってる。どこからどう見てもお前はトリコの他ならない」

（……わかってて言う。性悪ギツネ……）。

「それでも」

「なんです」

静かに風が吹いていた。サラリとキツネの背中で纏めた長い黒髪

が舞う。同じようにトリコの背中でも漆黒の髪が風に揺れた。

「求めないのか？お前なら求められるだろう？」

トリコはふと思う。

キツネのその言葉が、なぜか、真実を語り、求めているようだと。

だから、咄嗟に答えを返せなかった。

「求めてみようとも思わないのか？」

ただ単に興味から聞いているのではない気がした。珍しく、キツネは返事を待つように、口を閉じた。

だから。

「わたしが求める唯一は、コトリの幸せな年月です」

「それだけです」

真実を求める真実の言葉ならば、返す言葉は本当の言葉。

「わたしは彼女と共に生まれてきて、望むのは彼女の生だけです。彼女の生のためだけにわたしはいる」

風が吹いて、背中に長く伸びたトリコの漆黒の髪を揺らした。

どこかで遠い昔に滅びたという鳥の鳴き声が聞こえた気がした。

強い声ではっきりと、凛として。

真実を返してもキツネは動じなかった。

まるで、それを最初から知っていたかのように。

これはトリコの中だけの呪縛にも似たものだったはずなのに。

「では」

キツネはトリコと話す時だけは視線を外さなかった。トリコはそれを知っている。

「わたしはこの世界の中の『唯一』と呼ばれるセカイがお前のものであり続けることを求めよう」

「トリコ、お前が自分の生と引き換えにしてもコトリを生かすのならば、お前はわたしが生かそう。わたしの真実の名をもって」

そう言って、キツネは満足そうに顔を緩めた。

4．戒めの白

この要塞は戒めのためだけに存在する。
来るべきその時のためだけに。
体を包むのは白。

この。

戒めの城の中で。

外界から遮断するように建てられた白い部屋には窓がひとつもない。トリコはその扉を何食わぬ顔で開け、いつものように自分の席へ向かった。
部屋の中には数十台のコンピュータが、机ひとつひとつに設置され、すでに数人の子供達が席に着いていた。トリコより年長の子供達は入ってきたトリコに一瞥し、睨むような視線を送った後、またコンピュータの画面へと向かう。

「なるほど」

そんな知った声が背後に聞こえて、腰を下ろしつつあったトリコは勢いよく振り返った。

「キ、キツネ！？」

「それ以外の誰がいる」

「――――……って、何をなさってるんですかっ」

キツネは美山のキヨハルの置屋からトリコを連れ出し、この部屋の扉までは同行するが、今まで一度も中まで入ってきたことはなかった。

そもそも何を思っているのか。

『監視官』は捨てられた子供を軍に斡旋するという任務だけのはずで、その後のフォローまでする必要は任務外であるはずなのに。

「お前の職場にはまだ来たことがなかったな、と」

「……今更ですか……すでに3年も経ってるんですけど」

「そうだっけ？」

「コトリに切られたいんですか」

「しかし、さすがに上流階級のご子息なだけあるなぁ。挨拶が出来てるじゃないか」

（ああ、無視。しかも、これ以上、敵をわざわざ作る……嫌がらせ？）

項垂れ、キツネを見上げると明らかに不敵に笑っていた。

すでに数人の少年少女が立ち上がり、キツネを不快そうに睨みつけている。

「トリコ、私もお前の保護者として挨拶が必要かな」

（暇……できれば違うところで遊んで欲しい……）。

中央席の、この部屋で一番年齢と親の身分の高い『上官』がわざわざ出向いてくる。

「トリコ」

周りに聞こえないほどの小声でキツネは乞う。

「『上官』は、王龍軍第４部隊長の子息。次男」

それにトリコは同じように周りに聞こえないほどの声で返す。

キツネの目が鋭く笑った。

すでにトリコにはため息しかでなかった。

「そこのあなた。ここがどういうところか知っていて入室をしているのか」

滲み出る『オレは偉い』オーラは相変わらずで、トリコは『上官』と『キツネ』の戦いを項垂れながら見守る。できることならば、この戦いを無視して自分に割り当てられた今日の作業を済ませてしまいたいところだ。結果など見なくてもしれている。

「ええ。王龍軍情報局美山支部ですよね」

キツネは艶やかに答える。遠巻きに様子を伺っていた少女の目がうっとりと見つめていた。

（キツネ正解。ああ、ひとり虜が……って、アナタ、昨日はリクオウの話をしてませんでしたっけ）。

「わかっているなら早い。ここは部外者は立ち入り禁止です。あなた、身分を示すものは」

「私はトリコの保護者です」

（そして、美山華街の『監視官』。この身分は明かせないでしょうけど。内偵だから）。

「それの、ですか」

（ああ）。

冷ややかな、突き刺すような視線を向けられた。

（冷ややかな視線を浴びなければいけないのが、例え私だけだとしても。元々『上官』には目を付けられているし。そもそもキツネはそうなるのわかっててやってるだろうし）。

「貧乏くじ？」トリコは誰にも聞こえないように軽く自分に嘲笑をおくる。

「ええ。これの、ですけど。それがなにか？登録保護者ならば入室許可がおりているでしょう」

「……っ、では。許可の提示を」

「なぜきみに」

「ここはっ、私のっ」

トリコは声を荒げた『上官』に目を向けた。

（勝負にもならないほど）。

次に冷ややかな目で一瞥したのはトリコだった。上等な生地で作られた隣の制服を引く。キツネがわざわざ見下ろして首を傾げてみせた。

（撒いた種の収拾は私ですか……）。

「ここはあなたのものではありませんが」

「なっ……」

トリコの言葉に『上官』は顔を真っ赤にした。固唾を呑んで見守るのは、上官の取り巻きの子供達。もちろん上官の味方だけれど。

「もちろん私のものではありませんけど」

「あっ、当たり前だろうっ！捨てられた奴なんかにっ」

トリコは冷静にそれを見ていた。

相手が感情的になればなるほど、冷めていく自分の感情に辟易しながら。

「私が親に捨てられた子供だからと言っても、ここでは関係ないはずです。事実はひとつ。シュミレーションにおいて私が3年間、一

度も首位を譲らない、それだけです」

トリコの配属先は特異部署『情報局』。

コトリのような実戦部隊とは違い、遠距離にてコンピュータ操作をし、相手国のシールドを流れる情報をコントロールするのが役目だった。無数に流れるその国を守る為の情報を、そして記号を見極め、読み、同調することで相手国の防護壁を崩す。

どの国にも存在する、戦いの要。

「もっとも、美山支部にいる情報局員のうち、親に捨てられた子供は私だけですけれど」

言い放つと、『上官』は押し黙った。

捨てられた子供達が、キツネのような監視官によって兵として訓練所に強制的に入れられる。それは事実。けれど、同時に王龍軍本部に所属する百数十名の幹部たちは、上流階級にいる『元々の軍人』だ。戦いの度に簡単に切り捨てられていくのは、親にさえ捨てられた子供達。

捨てられた子供達がその実力によって本部に上がっていくことは、稀にあることだ。指折り数えるほどだとしても。

役職がついている兵は、ほとんどが一般家庭中級以上の家庭の出身で、リクオウがそうのように。

リクオウは気にしなくても、リクオウとコトリ、トリコの間には見えない壁がある。トリコにとってみれば、それはキツネの存在よりも強大な見えない壁だ。

容易く壊れるなら、もっと簡単に生きていけた。

トリコは真っ赤になって次の言葉を思案する『上官』を静かに見据えた。

（弱くても。人らしい）。

うらやましささえ覚える。

尤も。それを言ったら、彼はもっと怒って、親の力で自分をここから放り出してしまうかもしれないからそれはできないけど。

トリコは『上官』が感じられないように、自分でもわからないうちにそっと微笑む。

頬に温かな久しぶりの感触がもたらされた。触れるか触れないかの距離にそっと置かれるその手は、間違いなく成人男性の大きな角ばった手。細く長い指。

見上げて、トリコは「え？」言葉を漏らした。

キツネは痛そうな表情で見下ろしていた。

3年間、一度も見たことのない顔で。

「キツ……」

（なんて、顔を）。

空気を切るような音がして、全員がはっとしてその方向を振り返った。

「――――――あなたは……」

一番最初にそれに気がついて声を洩らしたのは、キツネでも子供

達でもなく、キツネとそう変わらない年頃の男だった。

「アサツキ教官！これはっ……あのっ」

硬めの黒髪は短髪で、肩幅も広く、がっしりとした体格。昇り龍の紋章を付けた王龍軍の白衣の制服を着るとどこからどうみても、実戦部隊の全くの軍人に見える。小さな子供達にはその見た目だけで恐がられる毎日を送っているが、実際は少し違う。

情報局美山支部の支部長、アサツキ少佐。

トリコたちの教官であり、軍の少佐。トリコはアサツキに信頼を置くまではないにしろ、拒否することはしなかった。あくまで仕事に忠実な、どちらかといえば不器用なアサツキが嫌いではない。

言い訳をし始めようとする『上官』に口を開かせず、アサツキは一直線にキツネに近寄る。

「久しぶりだね？アサツキ少佐」

少佐は無言のまま頭を垂れる。

（キツネが上）。

トリコはすぐに判断する。つまり、キツネは少佐より上の地位にいるということだ。王龍の軍組織の位置づけは年齢ではない。

すべては役職だ。

それがわかったのか、『上官』は急に青い顔をして押し黙った。

「急に来て申し訳ない。たまたま、トリコと同じ方向に用があった

ものだから。頭を上げて」

「はい」

頭を上げ、アサツキはそれでも上司に向かうように目を向けた。

「きみが一線から身を引いたと聞いたときは、王龍軍の末路を見たかと思ったが」

「いえ」

アサツキが言葉少ななのは『多分、知っている』からだ、トリコは再発した頭痛がさらに痛みを増したように感じた。

「きみの邪魔をしてはいけないね。トリコ、ちゃんと仕事するんだよ。あとで迎えに……」

「ひとりで帰れますから」

いつもと同じように言葉を被せた。

「用がおありなんでしょう？いってらっしゃいませ」

「……相変わらず……まあ、それじゃあ、アサツキ、トリコ。また」

「はい」

扉が閉まるまで、トリコとアサツキはキツネに頭を下げ続けた。

やっと靴音が消えて、トリコは眉間に皺を寄せて顔を上げた。

「まったく」

咄嗟にトリコはその声の出所を見上げる。

アサツキはトリコ以上に眉間に皺を寄せ、困ったような表情をして扉の先を見つめていた。

「あのひとは」

呟きはトリコの元だけに聞こえた。見ているのに気がついたのか黒色の目が向く。

「あ」

気まずそうに一声洩らし、頭を掻くと、珍しく不器用に苦笑いした。

「大変だね」

つまり。付け加えるのは『きみも』。で。

（随分、キツネの狐っぷりを知ってる）。

アサツキはトリコの思慮に構わず、いつものように教壇へ向かって行った。

３年前、トリコはコトリとは別の場所へ連れてこられた。
そこは隔離されたように、それでも厳重に施錠され監視される部屋だった。
扉を開けるとまず目に飛び込んできたのは見慣れない物体だった。
それをアサツキはトリコに一つずつ説明していった。

『キミの席はここだ』。

仏頂面もいいところで、アサツキはその体格に似合わず繊細な指の動きで次々と何かを操作していく。席について目の前に『スクリーン』と呼ばれるものが存在していることに気がついた。横からでは薄すぎてその存在さえわからなかった。
ちなみにアサツキが黙々と指を動かしている。一目もくれずに淡々と、それでいて決まっているのだろう作業をしばらくこなし、ふと指を止めた。

『これがキミのシステムだ』。

端的で澱みのない言葉がかかる。

『システム』。

初めて聞く単語だった。その後に、アサツキからシステムに名前を付けるように言われた。
ああ、だったら。

『シュ』。

『朱』、この国のなによりも尊いもの。

『呪』、自分全てを現す名として。

『トリコ』。

彼はまるで昔から知っていたかのように名を呼ぶ。そうして、システムとトリコはここでひとつになった。情報は限りなく、溢れるようにトリコの元へ継ぎ足されていった。トリコはその情報をただひたすらに受け止めた。シュはトリコに嬉々としてたくさんの情報を与えた。

トリコは暗闇の中で、ふたりにしかわからない記号の世界を築き上げていった。

『トリコ！』

白い壁に囲まれた要塞の中で、彼は彼にとって唯一の名を呼ぶ。

『トリコ』

感情に構わず、すべては『トリコ』が欲するままに。

それが、たとえ。

トリコが自分をこの孤独な要塞の中に縛り付けるためにした、厳罰のような戒めの言葉だとしても。

『トリコ、シーグルの声が死んだよ』。

それがシュの今日の第一声だった。トリコは小さく声を上げた。

この世界に存在する5つの国のひとつ、シーグルは、他の四国によって常に脅かされている国だった。それを知ったのはやはり暗闇の中、その世界でのシュの情報で、トリコはそれから文献でシーグルについてたくさんの情報を得た。

（なぜ、シーグルをそんなに欲するんでしょうか？）

その答えはいまだ出ない。

『戦いになるね』。

シュが断言したのは過去のデータによるところだった。

シーグルの人々が『声』と呼ぶその存在の死。それと並行して、シーグルの『臨海線』と呼ばれる保護膜が弱まることがわかっている。もちろんそれを逃す手はなく、各国が一斉にシーグルを目指した。

保護膜はどの国にも存在し、第一、第二と大抵の国が二膜で国を悪化した環境から守るために張っているが、シーグルだけが第三膜目を所持していた。第一、第二が他国と変わらない中、その膜は特化していた。

常に流れ続ける臨海線への情報は、人が他の保護膜へ組み込む量と室を逸していた。

（声が……シイは？）

『まだだね。でも出るよ』。

トリコの興味はひとつ。

臨海線の難攻不落といわれる、現在無敗のシーグル最強部隊の動向だ。

難攻不落のシーグル、シイ。コトリの幸せを奪うのは、その男だろうと思っていた。

「早い……」

コトリを助けなければいけない。早ければ、今回の戦いにコトリ

は巻き込まれる。

（シイの一番新しい編成データを送ってください。）

『了』。

すんなりとシュは了承する。すぐに文字の羅列が現れた。
読み進めるが、それが前回の声死亡時の戦いの記録だとわかり、トリコは思考を変えた。その記録はシイのことを知ったときに流れていた各国の情報から自分で纏めたものだった。

（ハッキングの準備をします。繋げてください。）

「トリコ」

現実から突然声が掛かる。
しまったと思ったときには遅かった。一度、目を閉じ、情報を消すと声の主を見上げた。

「トリコ、それは業務外だ」

アサツキが無機質に見下ろしていた。

「……はい」

「それと」
珍しくアサツキがトーンを落として付け加えた。

「その情報は、今はキミには必要はない。忘れなさい」

（最初から見ていたんだから、そのときに言えばいいのに。）

ため息をつきながら、トリコは渋々、了承の返事をした。

「王龍は今回もシーグルに兵を向ける」

結局、終了時に扉の外に出たときにキツネがいなかったので、トリコはさっさと建物を後にした。外はすでに夕暮れで、この国を守る保護膜と同じ管理室が作り上げた夕日が昇っていた。端にはちゃんと月が作られ、遠くに見える月とふたつ、空には浮かんでいた。

「王龍がシーグルに勝たない限り」

（コトリの幸せはない。これからが、わたしが何もわからないコトリをこの場所へ引き込んでしまった罰）。

「シーグル……」

そこにはなにがあるのか？

多量な文献からも情報からもトリコは何も見出すことが出来なかった。シーグルは鉄壁の臨海線で包まれている。だからこそ、シーグルの今の内情を見るのは難しい。シーグルを守る『情報』をトリコのシステム操作の実力では突破することが出来ない。

「シイ」

会ったこともない人物の顔を思い描くことはできなかった。情報の波に埋もれ始めてから、真実だけが全てになり始めている。勝手

な想像をするのにためらった。

「臨海線」

（王龍が、アルファがシーグルに求めているのは、なに？）

自分の国のことだというのに、最終的に王龍帝が決定を下す王龍において、真意を見出すのは下っ端もいいところであるトリコには不可能に近い。

結局。

片隅に残ったのは『無駄な戦い』ではないのか、ということだけで。この世界にたった5国しかなくなってしまったというのに、まだ世界は戦乱の世にあることに、虚しささえ覚える。

トリコの情報の扱いの正確さは『シーグル』に向けられた感情から積まれたものだった。

「トリコ！」

可愛らしい声がトリコの耳に届いて、一度、頭の中から情報を追い出した。

「コトリ。終わったんですね、おつかれさまです」

「トリコも行ったんだ」

「大丈夫ですよ。わたしは、コトリと違って部屋の中でジメジメと仕事をするだけですから」

（常に鋭い視線に刺されながら）。

コロコロと笑うと、コトリはひとつに結わいた長い髪を揺らして

不思議そうに顔を覗きこむ。身軽な格好に背に背負った長い刀がゆらりと動いた。

「もう頭痛は大丈夫なのか？」

「ええ。もう一日が経ちますから」

そんなことを言ってもコトリはなんのことかわからないだろうけれど。きょとんとしたコトリは「大丈夫ってことです」と付け加えたトリコに笑顔を返した。

「よかった！トリコが痛いと悲しいもん」

はにかむような笑顔にトリコは胸が締め付けられるようだった。

コトリはそれでも心配そうにトリコを気遣って、隣をゆっくりと歩いた。

「それにしてもトリコ……」

「はい？」

「その刀、わたしがもってあげようか？」

突然の申し出に意味がわからず首を傾げると、コトリは唸る。

「だって、トリコに似合わないんだもん」

ああ。

あまりに可愛くて、コトリに抱きついてしまいそうだった。

小さな頃からコトリは何かあると『トリコ、トリコ』と名を呼び、べったりとくっついた。涙もろくて、すぐに泣いて、嬉しければ笑

って、笑いすぎておなかが痛いとまた泣いて。コトリの方が少し早く産まれたから年長ではあるというが、きっと自分の方が随分前からこの世に、『ハハ』というお腹の中に存在していたのではないかと思う。

「コトリ」

「ん？」

「そのままでいてくださいね」

「ん？うん」

わからないままにコトリは大きく頷いた。土に汚れた白衣を気にせず、コトリは赤く染まった空を楽しそうに見上げた。

「コトリ」

だから。

この声は、言葉は聞こえない。

「あなたを守りますから」

トリコは夕焼け空を楽しそうに見上げるコトリの横で、目を細めた。

「たとえ、わたしにどんな未来が待ち受けていたとしても」

わたしは。

わたしは、白に囲まれた戒めの要塞の中で。

体を包む戒めの白と共に。

5．無彩の王（前編）

いつからこの空は灰色になったのか。
廃れた空を眺めるのが、いつか、普遍的な日常となる日がくるのか。

トリコを振り返る、愛おしい同じ顔をもった分身は、いつも寂しそうに「いってきます」と言う。離れることがただ単に嫌なのだ。純粋に、彼女はそれを顔に出す。

「いってらっしゃい」、コロコロと微笑みながら返すと、コトリは今度は「いってきます！」楽しそうに弾んだ声を返した。
無邪気で無垢で。
トリコはそんなコトリが愛おしくて、けれど心配で。
あっという間に遠ざかっていく同じ小さな背中を、消えるまで手を振り見つめていた。

そして、その日。

起動した片腕『シュ』が開口一番に伝えたのは、トリコが予期していたことであり、最悪の事態だった。

（４０番台が出るよ。）

免れないことでもあったけれど。

「……コトリ」
呟いたとき、そこは永遠に続く暗闇の世界ではなかった。スクリーンを覆うその影に、はっとしてトリコは顔を上げる。
「集中力が欠けている」
「……申し訳ございません」
特段表情を変えることもなく、アサツキはトリコを見下ろしていた。返す言葉はない。今日の本務からは確実に頭が離れていた。
「その情報はこの情報局には必要のないことだ」
「はい」
トリコは集中するために情報局員全員が身に付けるヘッドホンを外すと、立ち上がった。長身のアサツキはそれでもトリコを充分見下ろす位置にいる。
「プログラムを消去しろ」
「そ……」
言いかけて、トリコは口を噤んだ。アサツキに反抗することによって、今現在、貴重な最新の情報源であるシュというセカイを駆け抜ける片腕を失うわけにはいかなかった。
シーグルの声の交代に伴う各国の動向。
『シュ』が『シーグルの声死亡』をもたらしてから一週間が過ぎていた。すでに大国アルファは、隣国であり属国でもあるベータを伴い、襲撃を開始している。ウィザードも間違いなく数日で出撃す

る。トリコの情報は全てトリコが作り上げ、読み取った記号と符号のセカイから手に入れたものだ。

そして、自国、『王龍』。

まさか、自国の情報が一番手に入らないものだとはトリコは思ってもみなかった。

潜り抜けたネットワーク上の障害数は、アルファ、ベータ、ウィザードの遙か上をいき、それでも本部の情報タンクの中に進入できなかった。

「随分、腕は上達しているな」

「少佐」

アサツキはトリコとコトリの関係も把握しているに違いない。

「だが、それは本部の仕事だ。今日は帰れ。本務に支障をきたすことは無くても、お前の浮ついた顔を見るのはご免だ」

同時に、美山情報局内を管理しているメインプログラムによって強制的にシュの電源が落とされた。そうなれば、トリコがどんなに努力したところでシュを再起動することはできなかった。

「……はい」

自分自身が情けなくなりながらも、トリコは傍らに置いていた、キツネが用意した刀を片手に部屋を出る。部屋を出る際に、上官がニヤニヤといやらしい笑いを向けているのに気がついたが、目を向けることなく、トリコは決めていた場所へ足を向けた。

「４０番台が出る……」

真っ青に澄み切った青空が白の要塞の外に広がっていた。

眩しいくらいの偽物の太陽と本物の太陽の光に、目を細め、トリコは刀を背に背負いながら息をゆっくりと吐き出す。

「コトリ」

アサツキの言っていることは正しい。

『シュ』が拾い上げてきた情報は、トリコの表情を瞬く間に変えた。例え、それが他人に知られることのない微細な変化だとしても、トリコは自身で嫌と言うほどそれを感じていた。

両手をきつく握り締めた。

「このときが来た」

震える指先、肩。

本当は立ってはいられないほどの焦りと、すでに体を覆い始めた喪失感。

アサツキは情報局の各人が、それぞれのコンピュータを操作するときにつける心拍数や脈拍を測る装置結果を監視している。だから、表面に出ない微細な変化にも気がついた。

（アサツキ少佐は正しい。）

脳裏に浮かぶ、声のあるはずのない、『シュ』の声。軽くて、まだあどけなさを残す声色だと思うのは、実際に操作するトリコのイメージ上のセカイだけだ。

（４０番台。）

それはリクオウが率いる間違うことないコトリが所属する部隊だ。

トリコは口を結び、両手をきつく握り締めたまま、足早に目的地へと向かった。

「わたしがコトリを守らなきゃいけない」

『ダイロクジュウナナブタイ、トリコ。ニュウシツキョカ』

軽く電子錠が外れる音がして、トリコは冷やりとした空気の流れる沈静な部屋へ駆け込む。

「ソウマさんに書物庫のシステムを借りれば……」

王龍軍本部と緻密なやり取りを交わすのは何も情報局だけではない。貴重な文献が数多く所蔵されているこの美山書物庫にも戦線の陣を練るために、相手の履歴をしるために、情報を求められることがある。首都王龍から直接ここに来るわけがないとなれば、考えられる手段はただひとつ。

王龍軍本部とのオンラインが書物庫にも存在する。

そして、それは孤児であるただの巫女たちが扱えるような代物ではないのだから、必然として。

「ソウマさんが持っているものがあるはず」

トリコは確信を持っていた。
例え、ソウマがトリコにシステムを使わせないだろうと思っても。
それでも、可能性にかけないわけにはいかない。

（欲しい情報がまだたくさんある。）

右を見て、書物がぎっしりと天井までつながった書棚が並ぶ中にその姿がないことを確認し、足早に次の部屋へと向かう。5部屋に分かれている部屋の中にトリコ以外の人影はない。

（ソウマさん？）

足を緩め、そしてトリコはとうとう足を止めた。
高い天井を見上げ、冷やりと汗が背中に流れるのを感じた。瞬時にトリコを襲ったのはいままであった焦りではなく、違和感だった。

（おかしい。）

冷たい空気が流れるその機械音がどこか遠くで聞こえた。

（人気がない。）

ソウマ以外にも、ソウマが外したときの為に書物庫には巫女がひとりは常駐した。書物庫に入る許可は軍に所属する者達なら全てに与えられてはいるが、トリコが訪れるときは大抵、ソウマしかいなかった。他の部隊はほとんどが実地訓練を受け、この書物庫に用などほとんどないからで、情報局の面々も、こんなところで時間を過ごすなら、自分の家に帰るのだろう、まずトリコが他の局員達に会うことはなかった。
けれども、ソウマはいた。

ここの最終砦は、ここでこの貴重な書物を守らなければいけないのだ。
だからここには。トリコが来るといつも、必ず、ソウマがいた。
静か過ぎる部屋の中で、トリコは辺りの気配を伺う。

「トリコちゃん」

はっとして後ろを向く。
柔らかい声。

「ソウマさんっ」

ほっとして顔を緩める。ふわりとウェーブのかかった柔らかい髪、柔らかな笑顔は浮かばないまでも、白衣はいつもと同じ、王龍軍の制服だ。

「いらっしゃったんですね」

「あの、ね」

その声はどこか苦しそうで。
そういえば、少し血色の悪い、やつれたような顔をしている。

「ソウマさん？」

その声に惹かれるように、ソウマの体は崩れていった。

「ソウマさんっ」

目の前で一こま一こま、スローモーションのようにゆっくりとトリコにしてみればその大きな体がもろともなく傾いていく。

「ソウマさ……っ！！！！！」

静寂が包む、冷たく孤独な書物庫の中に悲鳴が木霊した。

滲む、その色を知らなかったわけではない。

むしろ、遠い昔に知っていた。

飛び散るその色は、まだセカイを見つけたばかりのその瞳に鮮明に映った。

『鮮赤』。

何も知らずに上げられた、金切り声に似た悲鳴だけが耳の奥に突き刺すように響いた。

自分の声だけれど、自分の声ではない。

自分はその状況を飲み込むために、すでに状況分析を始めている。悲観することも恐れることも飛ばして、ただ次の行動を導くためだけに体の全てが、同時に動き出している。

けれど。

その声の主は、世界が終わったように目を見開いて、その様子を凝視しながら声を上げ続けていた。

ああ。

わたしは。

こんなに冷静に冷徹に――――――冷酷で。

ふと、頬に感触を覚え、指でそれを拭った。

ああ。

隣を見れば、同じ声、同じ顔をした分身の童子は、その色の一身に受け、そしてただ世界を否定し続けている。

この色は。

そして、目の前に横たわり、びくともしないモノ、に目を移す。

違う。人だ。

認識しなおすのに少しの時間を要した。その時間を、セカイを受け取ることを拒否していたのは自分かも知れない。

悲鳴はやがて言葉になり、体を動かした。

けれど、その様子を後ろから、見下ろすように見ていた。

体が動かないのは、恐怖のせいだろう、と。いままで身を隠していた大人達が、いつの間にか自分と、そして同じ声体を持った童子と、そして動かない『おかあさん』を囲んで囁いた。

（おかあさん。）

同じように愛情を受けていた。

同じように生きてきた。

悲鳴を上げ続ける童子とは別に、自分はその場ですでに祈りを捧げていた。

悲しさよりも自分を支配し続けるのは『生きなければ』と、その思いだけだった。

「トリコッッ！！！！！！」

次の瞬間、そう叫んで童子は動かなくなった『おかあさん』から離れると、あっという間に自分の体に巻きつくように抱きついてい

た。

「トリコ、泣かないで！！！！！」

（泣いているのはコトリでしょう。）

「トリコ、泣かないで。わたしがいる」

（泣いているのは……）

「だから、トリコ。もう泣かなくていい」

同じ背丈の、小さな童子の肩越しに映された世界は、ピクリとも動かなくなったその女を多い尽くすように滲む色と同じ色をしていた。

『鮮やかな、赤』。

この色をわたしは昔から知っている。

そうしてトリコは背に背負ったそれをすっと引き抜いた。

5．無彩の王（前編）（後書き）

短いの3本で。……暗い……？

6．無彩の王（中編）

間違ってはいないはずだ。
張りつめた空気、漂う冷気。ここにはあるはずのないものが存在している。

「ト、リコち……」
床に力なく倒れたソウマの口から漏れる声に、心臓が大きく鳴った。

「だ、め……逃げ……」
ソウマのいつもの甘い声が、今は恐怖を連れてくるような宣告に聞こえた。

「どうしたんです」
白衣に滲んでいく赤は、忘れることはできない赤。血の色だ。

「逃げ……」

「なにがあったんですか」
呟くように言う言葉に返事はなく、荒い息遣いだけが耳に入った。

「あなたも、キツネですか」

（隠し事だらけじゃないですか、まったく。）

「逃げ……」

ソウマの口から出るのはそればかりで、トリコは眉間に皺を寄せ、それ以上ソウマから情報を引き出すのはムリだと判断する。

「わかりました」

ソウマが安心したように大きく息を吐き、そして気を失うのがわかった。

（うちの上司は揉め事の種だけまいて、収穫せず。）

軽口を思いながらも、同時に判断を下す。ソウマをここまで傷つける相手に勝てるわけはない。普段、全く血の気配を感じさせないソウマだが、仮にも王龍の大切な書庫を預かる番人だ。それ相応の武力を持ち合わせているはずだ。

「……はっ」

（まさか、本当にただの司書さんじゃないですよね？）

ぐったりと倒れるソウマを見下ろす。

（さすがに、そんなわけない、か。）

「どなたかは知りませんが、出てきてください。もしくは……、」

（書物棚には荒らされたあとがなかったってことは、物取り、不法侵入者ではないってことですね）

「さっさと出て行ってください」

（できれば、出て行って欲しいところですけど。）

トリコは言いながら、刀を前に構えた。キツネに言われて、毎晩、使いもしない刀の手入れをしてはいたが、まさか本当に使う羽目になるとは思っていなかった。

いつもと違い、その重さに、目を細めた。

（コトリもこの重さと戦っているのだろうか。）

重み、それは、きっと。

「随分と勇ましいな」

知らない声。低い声と共に書物庫の隙間から出てきたのは顔をほとんどフードで覆った男だった。左手に提げた刀には鮮血が滴っている。

（この男、ですか。）

見るからに武力に長けていそうな体格で、目の前に悠然と現れ、歩みを進めるその男はトリコの向ける切っ先などないもののように余裕でソウマの倒れるそばまで近付いた。

気配を探っても、他に気配はなく、トリコは両脇を締め、刀の勢力を一方向に向けた。

（ひとり。）

「あなたは誰です」

「随分、冷静なんだな」

背の高い男は、黒いローブを羽織り、見上げたトリコからも男の顔は全く見えない。トリコは震えだした手を握りなおす。

「あなたこそ、軍の方が同じ軍のしかもこちらの方が位が高そうですが、この方を殺めようとなさるとは、どういった冷静さから出たものですか。内紛でしたら、関係ございませんので、さっさとここから立ち去ってください」

噴出す音。

「はっ、なるほど……こいつはおもしろい。お前、名は」

（あのときの、よう。こんなときばかりキツネはこの場にいないなんて。）

トリコはキツネを初めて目にしたときを思い出す。

（あなたの『朱』が危機ですけど。）

「名は」

「名を言ったら、この場を引いていただけるなら、いくらでも。お安いものです」

「それはできない」

即答され、トリコは刀の先を近づける。

「目的は」

「言う必要もない」

「目的はソウマさんですか」

「違う」

トリコは目を閉じ、そしてすぐに開けて結論を出した。

「なぜ、軍のものだと思うんだ」

「書物庫に荒らされた形跡がありません。それにわたしがここの扉を開けるのに、いつもと同じ電子錠が同じように作動しました。同じように入室したと考えるのが妥当です」

「内紛だと思うのは」

「同じように入室したとして、開錠した際の履歴はすでに情報局に登録されています。それでも、その方法で入室なさったなら、上の方の意思が働いていないと後々、あなたは処分されるでしょう。それならば、最初からもっと違った方法を使えばいいだけのこと。それでもここにあなたは実際にいて、そしてソウマさんを瀕死の……急所から少し位置がずれているようですが」

「ソウマがそんなに簡単にやられるわけがないだろう。自分で寸前で避けたのさ」

（わかっていて殺さなかった、と。本当に目的はソウマさんではない。信用できることを言ってる）

「さあ、そろそろ余計な話はおしまいだ。賢い姫君？」

（来る！）

トリコが力を入れ、刀を前に突き出す。鮮血がトリコの顔に点々とかかる。

ソウマの背中いっぱいに滲んだ赤を横目で確認して、押さえつけた男の刀先を睨みつける。

（力を入れていない……ソウマさんの力を認めていながら、それでも刃を向けるほどの力。）

「余所見はいけないって、あいつに言われなかったか」

「あい、つ……？」

満身の力を込め、刀を引き離す。金属の摺れる音が不気味に鳴り響く。

「お前は情報局員だからこんなもんだろう」

（しまっ……）

瞬時に男の体が視界から消える。同時に、背後から鈍い衝撃が走った。

「バッ……！」

思わず緩めた手から刀がソウマの元へと落下していくのが、衝撃に閉じかけた視界の片隅に映る。そしてなぜか、背後からの罵声。

焦る声。

「危ないだろうっ！バカヤロウッ！」

（なぜ……怒られなきゃいけないんだろう……）

思わずそんなことを閉じかけていく意識の片隅に思いながら、最後に思い浮かべたのは。

「キツネのバカ」

痛い。

骨を素手で握られ、肉から引き離されるような鈍い、重み。

耳元で絶えず聞こえる耳障りな金物の摺れる音。

焦る声。

焦る声。

目を開けたくても、意識を戻したくても何かが邪魔をして、暗い闇の底にまた引きずり込まれていった。

痛い。

骨を素手で力の限り握られ、引き裂かれるような血肉の香り。

叫びたくても口は開かず、助けを求めたくても体は鉛のように動かず。

軋む体。

軋む、セカイ。

逃げ出したくても、痛みを越えた衝撃に、やはり闇の中に戻されていく。

ああ。

だれか、たすけて。

ああ。

だれか、やみのなかからわたしを出して。

ああ。

そこにいるのは。

だれ？

7．無彩の王（後編）

暗い部屋に衣擦れの音がして、椅子が引かれる音が二つ響いた。
一本の蝋燭が微量に揺れ、また元の位置に戻ると空気が揺れた。

『同志よ』

さらに反対方向でもう一本の火が灯された。

『準備は整いました、主』

若い男の声だった。

『7名の検体のうち、ひとりに受け入れたものがおりました』

蝋燭の火が、興奮を必死に抑えるように口早に話す若い男の声に震えるように揺れる。

『わかった。これで我々の主もその存在と、そして我々の計画も了承しないわけにはいかぬ』

『ええ。僭越ながら、この計画にわたくしめの力を注げたことを感謝いたします』

『ああ、伝えておく』

『は』

『それで、どれくらいで使える』

『昨日、二日がかりで行いました作業も全て終了し、あとは意識が戻るのを待つだけです。感情の欠落は免れませんでしたが、必要ない項目に入っていましたので。それと色彩も少し欠落した模様ですが、文字、記号符号、あのセカイ上のものになんら関係ありません。それと、少しの間はさすがに拒否反応が起こるでしょうから……』

『結論だけを求めているのだ』

『は。早くても7日、いえ……あと3日は』

『わかった。このことは他の者にもしばらくは内密にしておけ』

『は』

『3日後。あの部屋で待つ』

『はっ！』

『無感情の、無彩の王の誕生か』

再度、衣擦れの音が響き、そしてやがて二つの音が消えると灯されていた微かな蝋燭の火が音もなく、気配もなく消え、再びその部屋は暗闇に戻った。

静かに目を開けた。

目尻には眠っていた間流れた涙が溜まっていたはずなのに、その気配さえなかった。

天井は薄暗かった。無機質、それがちょうどいい。

腕を持ち上げようとして、重く感覚がないことに気がついた。

けれど、足は重いながらも動いて、なぜか安堵した。

「起きたか」

今度は知らない声ではなかった。驚きもしなかったのは、驚くということを忘れていたからだ。

「お前の警護をすることになった」

脳裏にそんな声が響いたが、まったく頭には入ってこなかった。

随分。

随分、長いこと眠っていた気がした。

「わたしの名は、」

「シッコク、でしょう」

笑いも起きずに、言い切った。言葉を発せられた口に安堵し、さっきから低い声を出す、知った主の方に動かせた首と頭に安堵した。どうやら、死んでいない。

「違う。だが、お前がそういうなら、それでいい」

男の声はあの時と違って、どこか沈んでいた。どちらかというと、何かを憂えているような雰囲気だ。

「ソウマさんは、どうなったのです」

「元々、命に別状はない。まだ絶対安静だが」

「……よかった、です。わたしのせいで、誰かが死ぬことはあれ以上あってはなりませんから」

シッコク、が、息を呑む音がした。

ソウマに書物庫で手ひどい傷を負わせた男、シッコクが、久しぶりに目を開けた視界に一番に入るとは思ってもみなかった。だが、シッコクはそこにいる。

「わたしがお前を狙っていたと、いつから」

「あの書物庫にはわたしとソウマさんしかいなかったので」

言いながら、また眠気に襲われ始めていた。それに気付いたのか、薄暗い世界でシッコクは、そっと頬を撫ぜた。

「まだ、眠るがいい。わたしがここにいる」

「……不殺ですか」

覇気もなく、呟くように言う。

「もう、わたしがお前を傷つけることは一生、ない」

力強い声がはっきりと返ってきて、一瞬、目を開く。

薄暗い、灰色の世界にしっかりとフードも何も隠すことのない、真実の『シッコク』の姿が映った。

「お前を守る」

衣擦れの音がし、目の前で『朱』に行う儀式のような、敬う最上の挨拶が行われた。

閉じゆく瞼の隙間でそれを捉えながら、聞こえなくてもいいと思いながら口を開いた。

「名は、トリコ、です」

7．無彩の王（後編）（後書き）

短いっす！短いっす……みません。

8．不誓の旋律（前編）

まだ、生きているのか。
それとも、生かされているのか。
私たちは、何のためにここにいる？

背中の痛みを堪え、ベッドから這い出すと、やっとのことで立ち上がる。

「……情けないな」
柔らかな前髪が元気なさそうにはらりと顔にかかった。

「いつもの人のよさそうな顔が台無しだ、ソウマ？」
冷や汗を押し殺し、ソウマはその声をする方に視線だけを向けた。

「……笑いにでも来たんですか」

「見舞いだ」
端的な言葉の意味は間違いなく、見当違いで、ソウマは目の前に立ちふさがる相手を見上げる。

「花束のひとつでもお持ちになったらいかがです」

「反論する元気はありそうだな」

「残念ながら、長い間、戦線で培われた反射神経がどうやらまだ衰えていなかったようです。尤も、あれ相手にはさすがに死を覚悟しましたけど」

「お前を死なせるわけにはいかない」

「証人程度にはお役にたてるかもしれませんね」

「ソウマ」

「もうあなたにわたしなど必要ないでしょうに。しかも、わたしはこんな失態を犯した」

ソウマは青白い顔で白い天井を見つめた。そして自分に嘲笑を向ける。

「そして、このざまだ」

夢で終わらせればどんなにいいか、ソウマは目を閉じても開けても見続ける夢に吐き気さえ覚えた。生きて罪を背負うことがせめてもの想いなのか、背中に受けた傷の痛みを堪え、ソウマは静かに口を開いた。

「それで、何の用です。まさか本当に証人とでも?」

主は、口を開くことなく、感情を相変わらず表に出すことなく、ただ立っていた。責められることさえも許されないというように、何も言わず、ただ見ている。

「もっとも、証人なんて必要ないでしょうが」

自暴自棄に吐き捨て、ソウマは眉間に皺を寄せた。

「あれは国のものだ。あれがどう動いても裁けない」

「知っています。まさかあれがわたしの前に立ちふさがるとは思ってもみなかったもので。あれがわたしの前に立つことは二度とないと思ってたのに……」

ソウマは状況を思い出し、苦虫を噛み潰したような表情で呟く。

あの日、気配もなく目の前に立ったあれに、少なからず背中に流れたのは恐怖による冷や汗だった。両手足は、まだ何も交わしていない状況で過去に捕らわれ冷たく、そして固くなった。

動くことさえ鈍くなった体は、軍人としてあるまじき状況だった。

しかし。

同時に、それはどうしようもないことだと、認識していたのも事実で。

ソウマは、手首に深くついた流れるような傷跡を無感情のうちに触れた。

弱さが身にしみた。

「わたしは……」

意識を取り戻したとき、すでにそこは病院だった。白い天井、白い壁、崩れることのない青い空。鳥の囀りは遠い昔に消え、それを誰も気にすることもない。

なのに。

「彼女は、知っていたのです。鳥の存在を」

不意に投げかけた言葉に反応はなかった。

「この国で『鳥』を最後に見たのは、王龍がこのシールド内で成立した時だと文献にあります。わたしもわたしの祖先でさえも、鳥という存在は知り得ることはない。身近に感じることがないものをどうやって知ることができたのでしょう。彼女は難民孤児です。そんな彼女がなぜ？」

言い続けて、口を噤んで、行き着いた最後の答えに両手で顔を覆う。

「――――――朱――――――」

不意に、空気が動く。

「お前は、どうしたいのか」

感情を込めない声ですべり出た声にソウマは多少の苛立ちを含めながら、睨み返す。

「睨んでも何も変わらない。無駄なこと。お前はそれくらい知っているはずだ」

「――――――っ、あなたはっ！」

「こんな国でも生きていれば珍しいものも見られるな、万年平和なお前がそんなに怒るなんて」

「馬鹿にしにいらっしゃっただけなら、さっさとお帰りくださいっ

！ここにいらっしゃっても何も進みませんよっ」

「そのようだ」

すぐに返され、ソウマは唇を噛む。

主は、踵を返し、そんなに広くもない病室の扉に手を掛けたところで足を止めた。

「なんです」

「ああ、そうだ」

「『朱』は生きている」

重要な言葉だった。

それなのに、その声はなんでもないというように発せられ、思い出したついでのように言われ、そのまま去っていった背中を呆然と見つめながら、ソウマは知らないうちに流れ落ちた熱い雫に口を開いた。

「――――――あなたってひとは……」

「……朱が……生きて……」

柔らかな髪が風に揺れた。

「……シッコク」

「ああ」

「その憂鬱な顔をやめていただけませんか。こちらまで憂鬱です。不幸を背負っても何にもなりません。しかもこれはあなたが、あなたの意思によって起こしたことです」

（……動かない。）

トリコは、起こされた上半身を横たわるベッドの脇に身を縮こませている体格の良い男を睨みつける。

「うっとおしい」

「すまない」

「謝られても困ります」

「すま……」

全身を黒衣に包み、『シッコク』は肩を落とした。間違いなく年齢はトリコにとってみれば、父親ともとれるほど離れている。いれば、の話で。

そんな大の大人が自分のような小娘に一言言われて、しょんぼりする姿は『かわいらしい』を通り越して、情けない。トリコはため息をあからさまにつくと男に向ける視線を弱めた。

「それで、ここはどこです」

思い出せないのに嫌な夢を見て、起きて、自分がいるはずの場所に自分がいなくて、状況判断が仕切れていない。

間違いなく分かっているのは、ここが病院か、もしくは――――。

（後者なんでしょうけれど。）

自分の身に何かが起きたことは間違いない。実際に、起きている。それを断言するためには他人の言葉が必要だ。

「まだ　、夢の中にいるのかもしれないから」

そんな、淡い期待を抹殺するために。

シッコクはさらにしょげた様子で口を開こうか開くまいか戸惑っている様子だ。

「実験施設ですよ、姫」

結局、決定着けたのは第三者の声だった。高音で、トリコにとってみれば、どこかいやらしい声。

（また、新しいのが……）

シッコクが振り返る前に、トリコは入り口に立つ男に目を向けた。

「さすがだ。わたしが見惚れたことだけはある、美しい姫」

陶酔するように若い男は言い、トリコに近寄る。

「生還する意思の強さと、状況判断力。軍のデータベースからも選んだ甲斐がありましたよ。他のはまったく使いものにならない」

シッコクが無言にどいた席に白衣の若い男が座る。

「どうも。僕の名は、タカツキ。以後、お見知りおきを、無彩の姫。何も言わずとも、姫は僕の元を離れることはできないけれど」

楽しそうに笑った。

「無彩の姫」

そう言って、タカツキはトリコの頬に手を添える。

同じ高さになった視線に、トリコはタカツキの顔を見据え、口の端を上げた。

「ああ」

鈴の音には遠く、けれども凛とした音色。黒色の伸びた前髪がトリコの白い肌にサラリと落ちる。

「ああ、あなたがわたしの体にメスを入れたんですね」

そして。薄く色付く頬も赤い唇も、冷酷なほど綺麗にそこに存在した。
タカツキの表情が変わり、トリコはコロコロと笑った。
「焦る声に覚えがありました。今も随分内心焦っていらっしゃるご様子。どうかいたしましたか？」
「い、いや……」
口ごもるタカツキにトリコは笑うのを止める。
「それで？」
「え」
「この体に何をしたのです。シッコクは知らない、けれど、あなたなら知っている。直接の指示はあなたが行った。あの手術。わたしと同じ年頃の子供が数名死んでいる、あの、実験のことです」
今にも倒れそうなほど青白い表情をしたタカツキは、顔を上げ、そして信じられないものを見るように言う。
「知らないはずはありません」
「……え、あ……」
「『実験は成功しなければならない、どんな犠牲を払おうとも知ったことか』吐き捨てていらっしゃいましたよ？もうお忘れですか？

その高名なアタマは」

「……それほど、なのか」

独り言のようで、トリコは黙ってやり過ごす。

「なぜ……そんなに強い、無彩の……姫」

自問自答するようにタカツキは呟く。

「さきほどから気になります。無彩とは何のことです」

「……色覚を大分、失っているはずだ」

トリコは言われて、窓の外に視線を移す。

（――――――空。空、空……空はこんなに色をしていた？）

見つめたまま黙ったことにタカツキは次の言葉を投げかける。

「両手が動かないはずだ」

（両手。両腕。）

「麻酔は」

「麻酔も大分、まだ効いているはずだ。統合しない意識が暴走しないように、それと……い、いや」

「続けたらいかがです」

冷やりと、抑揚のない声で告げる。

（両腕が自分のものではないように、重い……。それに、視力に偏りがある。）

「この実験施設の目的をまだ聞いていません」

そもそも。

背後に回ったシッコクは、何故かタカツキにさっきから殺気を向けている。

「あ、ああ」

何故か、不気味な表情で見返すタカツキにトリコはコロコロと笑った。

（哀れみか、自分のしたことへの贖罪か、それとも……何にしろ、なつかれたものです。）

「早く目的をおっしゃらないと、この方があなたを殺しますよ？」

肩越しに伸びた黒衣の太い腕の先には長い刀が伸びていた。その刃先はタカツキの鼻先へと伸びている。

「わっ、わかったよっ！ひっこめろっ、僕は先端恐怖症なんだっ！！！」

「目的を、タカツキ」

呼び捨てにしてもタカツキの意識は刃先に向かっているようだっ

た。もしくは、後ろの黒衣のシッコクの殺気に。

「今はわたしが聞いているのです。目的を言わなければ、わたしがあなたをこの腕で殺すまでです」

ぎょっと目を見開き、タカツキは口を開く。そして言う前にトリコの声にかき消された。

「たとえ、この実験棟を爆破してでも、わたしはこの体など惜しくはありませんので。どうやらこの腕と手があれば随分、作業がしやすいようですね？」

タカツキの状況からカマをかけてみただけだった。

「わっ、わかったっ！」

そして、タカツキはポツリと吐いた。

「……対シーグル用、情報処理網」

「情報……情報局のことですか」

「そんなちっぽけなものなんかじゃないさ」

トリコに対して、なにか諦めたように、けれど、嬉々として次の目的を見つけたようにタカツキは声高に言う。

「お前がいればこの世界が手に入る。お前は世界だ」

「……キツネも多少、おかしなことを言い出したりしましたが」

トリコは眉間に皺を寄せ、すでに自分の世界に入っていってしまったらしい、タカツキの意気揚々とした表情を見返した。

「あなたの方が遙か上をいっていそうで、恐ろしいです。できれば、無関係のまま人生を全うしたかったです」

「なんだ？」

打って変わって態度が大きくなったタカツキに「なにも」言い、トリコは聞こえないように、何度目かになったため息をついた。

「思ったより、精神状態が安定しているようだ。明日には実戦に入る。これで、1日短縮になった……はっ、わたしの技術の賜物だ」

（実戦？）

「まあ、せいぜい今日はそれと休むことだな」

それにはトリコは答えなかった。タカツキは満足気に席を立つと、部屋を後にした。

「それでは、また。無彩の姫」

気分の悪くなる声と言葉を残して。

9．不審の旋律（後編）

パタリと軽い音で扉が閉じ、残されたトリコは再度、ため息をついた。

「むさい……の、」

低い呟きにトリコは振り返る。

「あなたまでそんな無情な呼び名で呼ばないでください。わたしにはトリコという名があるのです、シッコク」

（もっとも、あなたもシッコクという名ではないけれど。）

「あ、ああ……あの」

「なんです」

「本当に色彩感覚がないのか」

恐る恐る、そんな感じでシッコクは口を開いた。さっきまでタカツキに向けていた殺気はどこへ行ったのか、トリコは問いたくなる。

「今日の天気は、なんです」

「え？あ、ああ……晴れだ。真っ青な空が……」

当たり前とでも言うようにシッコクは答える。

（真っ青、ですか……。）

再度、窓の外を首を回して見上げた。

なぜか、シッコクの口から『真っ青』あまりに清々しい言葉が出てきて可笑しかった。それが少し、救いで。

それが残酷なほどに現実を物語っていて。

『真っ青な、空』。システムがこの国の気候さえもコントロールしている。だから空が不機嫌な色になることなど必要にならない限り、なるはずがなかったのに。

「わたしの目には、雲ひとつない、曇り空の色を空はしています。そういうことです」

サラリと言い、トリコは掛けていた布団を顔まで上げようとして、動かない両腕に眉間に皺を寄せた。

「まったく。不自由な体になったものです」

決して、トリコはシッコクに向けて言ったわけではなかった。

シッコクは誰かの命により、自分を浚うように言われただけなのだ。タカツキの命であったかもしれない。けれど、向けた刃の状況を見ると、シッコクの本当の主はタカツキではないようだった。

「言ってくれ」

「え？」

そっと支えられ、トリコは起こしていた上半身をベットに戻され

る。そして肩まで薄い布団が掛けられた。
背中が受けた大きく角ばった手の感触に鼓動が早く打つ。
（もし……。）
その色の瞳が目に映る前にトリコは目を閉じた。
「トリコ。オレは、わたしは、お前だけの味方だ。誓う――――――、お前に、トリコ」
不器用に頭が撫ぜられる。
（もし、いたのなら。）
あまりに優しく声を掛けられるから、トリコは閉じた瞼を開けなかった。
（父、とは、こういうものなのだろうか。）
そう思って。
「シッコク」
「ああ」
「ありがとうございます。それと、これからよろしくお願いします。ただ一つ、約束があります」
「あ、ああ」

不器用なこの男に。
気を全て許したわけではなかった、決して。
けれど。
間違いなく、今までの生活に戻れない恐怖の中、状況を同じように把握した状態で『味方だ』と言ってくれるシッコクは心強かった。

（それだけ。）

トリコは目を開ける。近くにトリコが付けた名前と同じ『漆黒』の瞳が揺れていた。

「わたしが死んだら、あなたは逃げてください。たとえ、その身に宿る力がこの国一の力を誇るものだとしても逃げてください。そして、わたしのこともわたしと共にあったことも忘れてください。それが約束です」

漆黒がみるみるうちに大きく見開かれ、そして声にならないほどの小さな声で呟かれる。

「な、ぜだ……」

「そのままの意味です。それ以上もそれ以下もありません」

きっぱりと言い切り、トリコは惑うシッコクに背を向けた。

「なぜなんだ」

次に発せられたのは誰に向けたのでもない小さい声だった。

大の男が出すにしては小さく、そして戸惑いを含む声。
けれどトリコはもう声に何も出さなかった。
そっと目を閉じた。

――――――トリコ。聞こえる？
（だれ？わたしの名を呼ぶのは。）
――――――トリコ。僕だよ。トリコ。
永遠に続く黒い世界にトリコは目を覚ました。体の感覚はない。
（ここは、どこ。）
声なき声、意識上の自分の声に導かれるように、トリコの頭はすでに動き始めていた。
『だれ』。
『どこ』。
ふたつの答えをもってきたのは、ずっと呼んでいた声だった。
――――――トリコ。やっと僕の場所へこれたんだね。待っていたよ、トリコ。そして『キツネの朱』の女の子。まだあどけなさを残す声。その単語にトリコは呟く。

（シュ。わたしはあなたとつながっている……。）

断言を含めて。

（そういうことですか。『情報処理網』。）

意識上の世界だ、そう確信を持ったトリコはそれでもあるはずのない両腕を見下ろす。

――――――きみの両腕は王龍のメイン情報網に直接入れるんだ。この国の誰よりも早く、この世界のあらゆる情報を取り入れることが出来る。操作もできるはずだよ。僕達は王龍を一度介さなければいけないけれど、きみはこの国のどこにいても、その腕をその手を僅かな情報が流れる空間に触れるだけで、直接取り入れることができるんだ。聞かなかった？あのバカから。

言葉もそうだが、どうやら本当に嫌っているらしい。

（タカツキのことですね。）

――――――腕は二流さ。王龍もあんなバカに触られて嫌がってるよ。

（おう、りゅう？）

――――――ああ、そっか。トリコはまだ知らないんだね。王龍の情報を管理している大元のシステムの名前だよ。王龍はきみに逢いたがっていたよ。僕のことを伝説の『シュ』と名付けたきみに、トリコ。

（オウリュウ……、それにはどうやって行ったらいいの？わたしも、会いたい）

――――望まなくてもすぐに会えるよ。僕がきみに会いに来たように、王龍は自分では動けないけれどだけど、きみたちは必然的に会えるんだ。……ねえ、トリコ。

（はい）

――――きみが欲しているものを教えて。

（シュ？）

――――僕はこれからもきみと共にある。やっと同じ世界に立てた。僕はずっと望んでいた。だけど、きみがここにくるにはたくさんの犠牲を払わなければいけないから、諦めていたんだ。だけど。

静かに、あどけなさを残す声は丁寧に言葉を紡ぎ出す。

――――だけど、あのバカは勝手にきみにたくさんのものを捨てさせた。

（たくさんの、もの。）

――――明るい色は見えにくい。砂嵐のようなもやがかかる。

（はい。）

――――両手、両腕は鉛のように。

（はい。）

――――――不安定な生活でも、今よりは平和な時を。

（……わたしはコトリが幸せであればそれでよかったんです。この体がバラバラになろうとも。けれどわたしはもう、彼女を守れないのでしょうか。）

ずっと。

それだけが心残りだった。

身が滅びようと、それは遠い昔に『それでもいい』と決めたことのひとつだ。

けれど、その誰に告げたわけではない不誓いは、たったひとつだけの引き換えとしてだけ。

（この間、シュと最後に会ってからどれくらいの時間が経過しているんでしょうか。）

――――――もうすぐ3日目に入るよ。

（王龍４０番台は出ましたか。）

――――――昨日、シップでシーグルに向かった。

（シイ軍は。）

――――――アルファ、ベータの総攻撃にあってる、昨日４０番台が出た後に応戦を開始している。シイも臨海線へ向かったよ。

（コトリ。）

――――――トリコ。アレはきみの生身を守る唯一だ。ねえ、トリコ。

『あれ』、シュの指す人物を思い浮かべ、シュがそれを知っていたことに不思議に思う。

――――――きみの病室は情報の網が張り巡らされている。キミの両腕の力は強い。だから僕達はきみを知る。きみが欲しいものは全てあげる。

（実験施設全体に張り巡らされた情報の網。だからタカツキは怯えたんですね。わたしが本当に操作できるから。）

――――――トリコ。

その先に続ける言葉を、シュはうずうずしているようだった。

（シュ。）

何度か呼びかけて、シュは「なに？」嬉しそうに『振り返る』。

そこは暗闇だった。

けれども、トリコはシュの姿を見つめていた。あどけない声に合う、その姿はかわいらしい少年で。

だからこそ。

同じ誓いを。

（わたしが死んだら、あなたは逃げなさい、シュ。あなたは誰のものにもならない。けれど、わたしを忘れて逃げてください。）

――――――どうしてっ！？なんでそんなこと言うのさ！！！トリコッ！！！

（それ以上もそれ以下もないのです。）

シュは叫んだ。

――――――アレに、シッコクは生身の人間だ！どんなにこの国一番に強い暗殺者であっても、王龍帝所属の唯一であっても！だけど、僕は違うっ！トリコ、トリコは僕に名前を付けてくれた。この国で一番尊い名を。トリコっ！僕はずっとトリコと一緒にいるんだ、絶対に。

駄々をこねる子供と一緒だった。まだ、小さなトリコでも本当は叫びたいのに。

（シュ。わたしは誰に認められなくても、シッコクにそしてあなたにしたこの誓いを守ります。）

シュから返答はなかった。

トリコも暗闇の中で目を閉じた。

今度、開けるときはコトリの顔が見られると信じて。

10．ホログラム

触れたいのに。

触れたいのに。

この手は動かず、この手は力を持たず、この手はホログラムで。

待ちきれないというように病室に走りこんできたタカツキは、シッコクによって取り押さえられた。

目を開けたトリコはあまりのばかばかしさに、本日一回目のため息を落とした。

着替えるためにシッコクとタカツキを部屋から追い出し、口と足を使って不器用にいつもの白衣に着替えたが、腰の紐を止められず、仕方なくシッコクの元へ顔を出した。頬を赤らめながら、これまた不器用に蝶々結びにするシッコクを見ていたら、トリコの方が恥ずかしくなったくらいだった。

髪を梳くことも出来ないのでシッコクに頼む。さすがに結うことはできなそうだったので、長い黒髪を揺らしながらタカツキの前に姿を出した。

「遅い」

「あなたが実験に失敗して両手両腕を動けなくするのが悪いんです」

「……口の減らない姫だ」

「姫ではないので、おかまいなく」

タカツキは黙った。後ろでおどおどしているシッコクを敢えて無視した。どこか遠くでシュの笑い声だけが聞こえる気がした。

夢の中で会ったシュから得た情報で、王龍の全ての情報を持つシステムの存在がわかった。

（今は、とにかくコトリのことだけを考える。）

言い聞かせるようにして、ブツブツと文句を言いながら、先に歩き始めたタカツキの後を追う。その後に黒衣のシッコクがいつものように焦らず存在を消すようについた。

「トリコ。わたしはいつでもそばにいる」

そう言って、本当に姿を消すと、トリコはタカツキと二人だけになり余計気分が悪くなった。タカツキは昨日と違い、実験用の白衣を着ていなかった。その代わりに身に付けられたのは、トリコにとって身近な制服だった。

（王龍、軍。）

タカツキが何気なく纏っているのはキツネやリクオウ、そしてソウマと同じ王龍軍の制服だった。さっと確認しただけだが、胸の紋章は確かに『昇り龍』だ。

（明らかにキツネ側ではない。）

決してキツネ寄りに自分がいるわけではないが、トリコにとっての比較対象はキツネでしかない。

ちなみに、身近な王龍軍人たちは間違いなくキツネ側だ。

（まさか脅迫して……キツネならやりかねないけど。考えていてもきりがないから、コトリの所属はキツネ側だとして。）

タカツキがした仕打ちがキツネの指示によるものとは考えにくい。

（あの人は……あれでも。）

トリコは首を横に振る。ちょうどタカツキが振り返ったところだった。

「無彩の姫。ここがあなたの唯一の居場所だ。どこにいてもここに帰る。あなたはここでなければ生きられなくなる」

タカツキの眼鏡の奥で切れ長の目が嗤う。

直線的な廊下の行き着く先に両開きの扉があった。特段、変哲もなく、ただその扉は燻った銀色をしていて重く存在していた。

（重い。）

真っ白な壁に閉塞感を覚え、白熱灯が点々と灯る天井に圧迫感に追われる。トリコはその扉の先に吐き気を感じていた。

「相棒はこの中にいる。さあ、入りたまえ」

（頭が痛い。）

諦めが少し、それでいてその先に待つ『なにか』に多少の思いをめぐらせて。それでも。

両手に滲む汗はとても冷たくて、覆えない自分の体がもどかしい。目を閉じた。

誰も呼ぶ声は聞こえない。

けれど、感じたそれに勢いよく目を開けた。

「シッ、コク」

同じように扉を見つめる険しい顔の男がいた。いつの間にいたのか、シッコクは前を見つめたままトリコに従っていた。大きく体格の良いシッコクを包む黒い装束がトリコを現実に引き戻す。

「必ずいると誓った。おい、お前」

最初の文句はトリコに優しく響き、トリコの冷たい片手に大きな角ばった手が不器用に触れる。次の言葉は目の前で嗤うタカツキに。鋭く、刺すような視線を向けて。

「なっ、ななななんですかっ！」

「入るが構わないな」

「なっ、そっ、そんなことっできるわけがっ」

昨日の一件でタカツキに多大な恐怖を与えたのか、シッコクの一

声一声に背を伸ばし一歩後ずさる。

「いいな」

もしくは、本当のシッコクを知っているのだろうか。

「そんなのだめに決まってる！」

予想以上の大きな声。タカツキは肩を大きく揺らして息をする。
トリコはその様子を見て、小さく本日二度目のため息をついた。
けれど、今度は呆れるでもなく、ただ、トリコは添えられていた大きな手がしっかりと握る感触に目を細めた。

「シッコクはわたしと共にあるものです。入れますよね？」

あえて疑問系にするとタカツキの顔が青褪めた。

「な、そんな、の……」

「ああ、そうでした」

トリコはコロコロと笑う。

嗤う。

「この施設にはわたしと繋がれるラインが張り巡らされているんでしたね。すべてが思うがままに」

シッコクのことを『共に』と言った自分が不思議だった。それ以上に。
真実を隠すようにトリコは毅然と笑みを浮かべた。

「開けてください、タカツキ、中佐」

びくりとタカツキが震える。

「な、なぜ……」

「『なぜ』？」

「中佐、だと……」

「何を、おっしゃっているんです。あなたがこんな体にしたのでしょう？あなたの存在など容易く調べられましたよ、王龍軍、情報局局長、タカツキ中佐」

冷やりと空気が張り詰め、タカツキが唾を飲み込んだ。そんなことおかまいなしに一歩を踏み出す。手を離さずに少し後ろをシッコクが歩いていく。扉に近付くにつれ、頭の中に高音の音波が直接響いた。

「そ、うだった……な」

タカツキは一言うわごとのように呟き、王龍の制服の上に白い張

りのある布を頭から被る。

「タカツキ中佐」

扉の前に立ち、トリコはタカツキを見遣る。三人の他に周辺に人影はなかった。

「な、なん……」

「それをシッコクに」

渋々というようにタカツキは同じ布をシッコクに無造作に放る。シッコクは無言でそれを頭から被った。けれどタカツキもシッコクもそれをトリコに渡そうとはしなかった。だから敢えてトリコは追及しない。

それが。

普通のひととの違いだと。

自分が普通のひとではなくなった証。

トリコは静かに扉が開かれるのを待った。

音もなく厚みを持つ扉が開く。薄暗い部屋。

「さあ、無彩の姫。仕事だ」

そう言われて、トリコは返事をすることもなく自然に足を踏み入れた。冷たく暗い部屋の中に入ると自然に頭痛も高音の耳鳴りも消える。

トリコは長い黒髪を冷たい空気の中に揺らす。何かに怯むように緩んだシッコクの手から抜け出すと、昔から配置を知っているかのように足を向けた。

たった一つ、スポットライトに浮き出されたような部屋の中央へ。

「ここはなんだ」

小さな声はシッコクから漏れた。目の前には何かにとりつかれたように歩みを進めるトリコの姿がある。

「ここは」

後ろからの気配にも振り向かず、シッコクは目を見開いた。

「王龍の中枢、『王龍』」

知った、知りすぎた声だった。

「久しぶりだな」

「……あんたが、これを……」

押し殺した声で非難し、シッコクは片手を柄につける。

「わたしではない。タカツキ」

「はっ、はいっ」

「この男達が勝手に進めたことだ。とはいえ、わたしの責任に等しいだろうな」

白衣の男は言い捨て、シッコクの脇を通り抜ける。

「わたしは、彼女に近付けないかも知れないな……」

通り過ぎる瞬間、聞こえた呟きにシッコクは耳を疑った。なかったことのようにトリコの進んだ後に歩みを進めて行く。

「なんで、あいつが……」

「我々はあの方の為に動いているのです、あなたのような野蛮なものとは訳が違う。我々は王龍の未来のために」

「あの子の体を不自由にし、あのこの未来を奪った。まだ8歳だぞ！」

冷ややかな目で、嘲り笑うようにタカツキは長身のシッコクを見上げる。

「我々はみな王龍帝のために、そしてこの国の未来のために。ちっ

ぽけな犠牲など知ったことか！」

「なんだと！？」

「あなたが、お前がそんな口を聞くとは思わなかったですよ。その手にどれだけの命を手がけてきたんです？その手に、いや。その体に染み付いた血は、我々よりも遙かに多いあなたが、今更何を言うんです。隣に立つだけで生臭い血の匂いがしますよ？ふん」

シッコクは無造作に両手を見つめた。

「今更、何を言うんです。この国、王龍付けの暗殺者である、あなたが」

吐き捨て、足早にタカツキはトリコと男の後を迷いなく追った。

「いまさら、か――――――」

シッコクは眉間に皺を寄せ、固まった体をそして視線をぎこちなくトリコに向けた。

「……トリコ」

スポットライトが当たっていた場所に辿りつく。けれど、そこはただの打ちっぱなしの床で、何もなかった。

トリコは眩しいほどの白熱灯の白い光が二方向から当たり交差した場所を目を細めて見つめた。

（……昨日シュが言っていた、王龍がいるのだと思ったのだけど……。）

寒い、というより冷たい空気が体を包む。首筋が冷たく固まってしまったようだった。

（ここも、ラインが通っている……）

トリコはこの部屋に入る前までは、ずっと『シュ』の声を聞いていた。昨日、トリコが言ったことに対しての反論をずっとし続けたシュは、次第に雑音が混ざり、そして扉の前に立ったとき、あどけない声は全く聞こえなくなった。

（感じない。）

単体の言葉が聞こえる声以上の数で存在し、直接脳内に入り込んできた。眩暈がする。シャットダウンする術を持たず、トリコはいつもの頭痛以上の痛みと吐き気に見舞われていた。

それが、この部屋に入った瞬間、止まった。

静かだ。

色彩が失われている部分が反応しているのか、部屋の中央のスポットライト意外は暗闇だった。広さは計り知れない。腕が動かないのはこんなに不便なことだったのか、トリコは唇を噛み締めた。

何もかもが数日前とは違う。

「無彩の姫。さあ、進むのです」

はっとしてトリコはその言葉のままに一歩進む。

――――――やっと、会えた。トリコ。

「え」

「どうかしたんですか、無彩の姫」

――――――うるさいな、そこの。もう少し……おや？珍しいのがいるね。

「え？」

「何があるんですっ！言いなさいっ」

――――――ふうん、きみが連れてきたんじゃないのか。じゃあ、いいね。もう少し前においで、トリコ。

シュ、と同じようにまだ子供の声だった。けれど、言葉とは裏腹に声の中に抑揚が含まれない。なんとなく少し安心して、トリコは数歩光の中に入った。

（……あたたかい。）

同時に眩暈がして、一気に体を崩していった。

「トリコッ！！！！！！」

最後に聞こえた声は懐かしい、不思議に安心する声だった。

いるわけがない、のに――――――。

11．夢、現

確かなものなど。

最初からこの世には何もなかったのか。

「いらっしゃい。トリコ。ずっと会いたかった」

シュと会ったときと同様、トリコは無重力の暗闇の空間に立っていた。意識の中だとわかっても、やはり手も腕もびくともせず歯がゆく感じる。

「あのバカにやられたところだね」

そう声がして、その姿が目の前に現れた。

同じ年頃の王龍軍の制服を着た少年だ。黒髪の少し長い前髪が人形のように白い肌に掛かり、どこからか吹いた風が少年の少し長い髪を揺らした。青い目、黒髪にはアンバランスなその瞳の色がトリコを見つめている。

「想像していた通りだ。トリコ、きみは美しい」

恍惚とした声はゆっくりと紡がれ、いつの間にか少年はトリコの目の前に、数十センチメートルほど近くに立っていた。

そっと手を触れる感覚。
腕が添えられた華奢な手に持ち上げられていく。
「あのバカには少し制裁をしないといけないな。きみをこんなにするなんて」
冷酷な声で少年は吐き捨てるように言い、それとは反対にトリコの傷のない手をとり、指一本一本をさするように優しく、まるで壊れ物を扱うかのように触れた。
「会いたかった、トリコ」
少年が頬を手につける。
サラリと前髪が落ち、トリコの前に少年の頭があった。
「まずはきみの手を」
青い目を見つめている間に、手に、そして指に熱いほどの力が注がれていく。
「大丈夫。僕はきみを絶対に傷つけないから」
「――――――あなたは」
目の前の少年は嬉しそうに目を細めて微笑んだ。
「ああ、声も美しいのか。トリコ。きみとやっと話ができる」
そういう少年の声の方が遥かに美しい。
「僕はオウリュウ。この国、王龍のメインサーバー」

「オウ、リュウ」

「そう。ああ、もっと僕の名前を呼んで」

なんとなく恥ずかしくなりながらも「オウリュウ」今度はスラリと言葉が出る。

「シュが言っていました、あなたが会いたがっていると。わたしは華街美山のトリコです」

「うん。キヨハル姐も美しいね」

「知って……いるんですか？」

「体がないからね。情報だけはこの国一なんだ」

そう言って、オウリュウは屈託なく笑う。

「さてと、きみにはいち早く欲しい情報があるでしょ？出来るだけ集めておいたけど、問題はきみがすぐに使えるかなんだよね。こればかりは僕は補佐しかしてあげられない。体の調子はどう？」

「手と目以外は」

オウリュウはさすっていた手を離す。

「え」

トリコの両手は重力に逆らい、しっかりとその位置を保っていた。そっと指に指示を送る。

ゆっくりと全ての指を折り曲げる。

「動く……」

「ごめんね。僕の意識が届く範囲でしかできないけれど。だけど、ここにいる限り、きみには不自由はさせないよ。ここは僕が作る世界なんだから」

満足げに言い、オウリュウはトンと胸を叩く。

久しぶりの手の感覚は、不思議で。

悲しくなるくらい愛おしい。

「ありがとうございます」

「うん。だったら、僕の名前を呼んで？」

「ありがとう、オウリュウ」

「良かった」オウリュウは微笑む。そして手をとり、引っ張って歩き出す。

「さ、急ごう。手遅れになる前に。きみが求めている情報をあげる。だけど、きみにはそれ以上のことができるはずなんだ」

「コト……」

「トリコならできる、そう信じている。だけど、もし無理なら僕が強制的にはずすからね」

「はずす、ですか？」

オウリュウは優しく笑い、その場に座るとトントンと手で床を叩

く。
トリコが指示された位置に座ると、白衣の裾がそこに広がり、豊かな漆黒の髪が揺れた。
「オウリ……ッ！」
人間と同じように鼓動が聞こえた。頭の後ろに回された両手に温かさと、触れた白衣越しに優しいぬくもりが伝わる。
抱きついたオウリュウは、耳元で囁く。
「第４７部隊はすでにシーグル軍、シイ部隊の下位部隊と応戦中。シイ部隊本隊はシーグル最終砦『臨海線』で待機。第三保護膜内にシーグル、アルファ、ベータ、ウィザード、そして王龍部隊、確認」
それは間違いなくトリコが今一番欲していた情報。どこにも、この王龍のどこにも流れていない、知らされるはずのない近況。
「アルファ、ベータの共和軍は規模が小さいね。過去のデータから言えば、敵城視察ってとこ。ウィザードは元々、辺境の小さな国だからね。だけど他国が知らない力を持っている。昨日の遠距離砲は本国よりのものだったらしいけど、空間転移っていうのかな？時間を乗り越えて撃たれたものだった。まあ、ウィザードはそんな力を持っていても五国の中じゃあ、弱小国。策が悪いからね」
トリコの耳元で言われたそれは間違いなく、王龍軍本部しか把握していない情報だ。
「僕はきみのためだけに動く。外部からの演算データは僕の分身が勝手にやるから大丈夫。だから、きみはきみがやりたいことだけを僕に言って。オウリュウ、本体は全てきみの意のままに」

それは、今は外に現れることのなくなったこの国の現帝『王龍』さえも凌ぎ、この国の軍事力を統べるに等しく。
トリコは見開いた目をすぐに細める。
目の前にいる自分と変わらない年頃の少年は、この王龍の全てといっても過言ではない機能を持ち合わせている。この実験施設爆破など、指を鳴らせば一瞬で演算を終え、回路を組み立ててしまうのだろう。

「恐がらないで、トリコ」

密着していた体をオウリュウが離すと隙間に冷たい風が吹いていた。

「僕はきみを待っていた。こうやって、触れられることが僕の唯一の望みだった。だけど」

顔を上げると、オウリュウの綺麗な青色の目が見つめていた。

「僕はこの国のひとたちもまた好きなんだ。上流部にいるひとたちはお金と地位と私利私欲に目を奪われてしまって、汚れているけれど」

純粋なのだ、とトリコは思う。
オウリュウに流れる情報は無限にあり、オウリュウはそれを避けることができない。

「だけど、他のひとたちは必死に生きている。きみたちがいる美山のひとたちも。キヨハルも、みな生きていることが美しい」

ゾクリ、そんな感覚がトリコを伝わる。

彼が、目の前にいる少年があまりに純粋で穢れなく美しくて。

「僕はずっと見てきた。生まれてまだそんなじゃないけれど、それでもきみが生まれるずっと前からここにいる。王龍を見てきたんだ。この王龍に生きている誰よりも昔から。そして」

オウリュウは静かに告げる。さらりと黒髪が青い目を隠して、トリコはそっとそれを避けた。嬉しそうにオウリュウは微笑み返す。

トリコの心の中で小さな音が鳴る。

コロコロと笑うことしか知らないトリコの中に何かの音が鳴る。

「きみを見つけた」

それは嬉しそうに目を細めてオウリュウは言う。

「もちろん、コトリもだけれど。トリコとコトリ。生まれた時から一緒の双子の子。不思議だった。この世界に双子の子はたくさんいるけれど、トリコとコトリは全てが同じで、だけどどこかにカケラがある。それを補うためだけにトリコとコトリは生まれてきた。二人でひとり。補って生きるのではなくて、ひとつになるために、生まれてきた。鳥の鳴き声が聞こえたあの晩に」

「トリ」

この世界からいなくなった美しいもののひとつ。

「この戦いが終わったら見せてあげるね。見せてあげるくらいだったらおやすいごようだよ。触れさせてあげることはできないけれど、何千という種類の鳥たちの生きている映像を僕は保有しているから」

「楽しみにしています」

ふわりとトリコは微笑む。

いつものように声に出さず。

オウリュウは一瞬、驚いたように目を丸くし、そしてそれを受け入れたのか憂いの表情でトリコを見つめた。そして、黒く長い髪を梳くように白い華奢な指でそっと触れる。

「トリコ。鳴けない鳥はいないんだよ」

尋ねる前に、オウリュウはさっきと同じようにトリコを抱いた。

「今回も、ウィザードは敵にはならない。シイ軍もこちらの攻撃が済めばすぐに手を引く手はずだと思う。元々、時間が解決する『声交代』の戦いだから。シイ軍は次の声が立つまで防げれば、臨海線が元のような強固な壁になれば、退く」

「声が臨海線の強さに比例している」

「どんな仕組みかはわからないけれど、確かにその通りだよ。声が死ねば、一時的に第三膜が弱まる。そして新たな声が登録されれば、第三膜、つまり最強の砦、臨海線に最強の力が戻ってくる」

「たとえば、声と呼ばれる人間がわたしのような体だとしたら」

「ありえないことじゃないと思う。だけど、各国を保護する膜には多大な暗号化された情報が流れているでしょ。それを常時リンクし続けるのは生身の人間には不可能だと思う」

「媒介」

「妥当だね」

「……一応、聞いておきます。オウリュウ、わたしもここにい続けるのは危険なの？」

トリコは、タカツキが扉を開ける前にさっさと覆いかぶさっていた白い布のことを思い出していた。

「情報の波は強いから。きみの精神を侵さない様に僕が気をつけている。それにまだこれくらいの情報量とレベルなら大丈夫。危険だと判断したら僕が強制的に切るよ」

「あれは……あの光の中があなたなのね、オウリュウ」

「そう。他の場所は静かだったでしょ？ノイズを遮断しているんだ。人には聞こえない高音で。そうでもしないと少しでも情報を欲して

いるアルファにハッキングされてしまうからね。僕のデータでも盗られたら、さすがに王龍軍とアルファは全面戦争になってしまう。それを避けているんだよ」

「シーグルを手に入れるまでは他国との争いを避けている……シーグル……」

「考えているところ悪いけど、トリコ、ベータが動いた」

緊迫した声が背中越しに聞こえる。トリコは唾を飲み、オウリュウの次の言葉を待った。

「援軍が到着した、この色はベータ。千……二千……本軍だ」

トリコにはその様子が想像できない。とにかく空に無数のシップが浮かんでいると思い込む。

「第二保護膜にベータの存在確認」

静かにオウリュウの報告を受けた。

「偵察じゃないな、これは……元からこの位置を狙っていたんだ。王龍軍本部から４０番台全体に指令、進軍」

唇を噛む。

「オウリュウ、向かう先は？」

「シーグル、シイ部隊の下位部隊をベータが力技で打ち破った。向

かう先は第三保護膜、臨海線。迎え撃つのは本軍、シイ」

トリコは暗闇を見据えた。

「シーグル、シイ……。難攻不落」

そして、まだ見たこともない青年の名を呟いた。

12．橙の空

なぜ、欲するのか。

何もない、橙色の空の向こうに。

トリコは冷たく静かな空間で過ごしていた。暗い空間にトリコだけスポットライトが当たったように浮き出されている。

「ウィザードは動力源を止めましたね。今回は出撃を見送る、もしくはタイミングをずらす……どちらにしろ王龍の敵ではありません。情報を引き続き王龍情報局へ流してください。ウィザードは情報局へ任せます」

はっきりとした声でトリコは告げ、何もない空中に指を動かした。

目を瞑ったままトリコはある程度、宙で作業をした後、息を吐き、そして吸う。

「了解。大分、慣れてきたみたいだね、トリコ……でも、その動作は無駄だと思うけど？きみの意思と直接、僕はつながっているから、きみが思うままに全てが動くんだし」

首を傾げる雰囲気がして、トリコの隣にふわりと存在が浮かぶ。

「見る、という動作が必要のないことだとわかりました。けれど、数年やってきた手法での作業を頭の中だけで整理するには膨大すぎ

ます。次から次へと記号と符号、数字がひと時も消えず、すごい速さでぶつかってくるなんて、すみません、こんな感覚は初めてなので」

トリコは言って、眉間に皺を寄せる。

「トリコしかわからない世界なんだよ。ごめんね、僕がもう少しトリコに選りすぐった情報をあげれればいいんだけど」

「いいえ。わたしが求める情報をオウリュウは的確に送ってくれているのでしょう？ですから、これはわたしの責任なのです。必要な情報が選別できていないということ。できるだけ早く処理をしたいのですが……この宙の手は気にしないでください。こうすれば少しは早く情報の整理がつきそうなので、勝手にやってることです」

コロコロとトリコは、オウリュウに「不器用ですみません」笑った。

「必要なことだけを欲する。そうすれば、きみの頭に直接、情報が記号で送られる。うん、大丈夫だよ。僕がいるんだから」

トン、と胸を軽く叩き、今度は白衣正装をしたオウリュウが笑う。

「はい」

「ベータが止まった。シーグル臨海線手前、１００キロ。シーグルも動力源を最低ラインに落として動きを見ている。……ベータが百下がったね」

「王龍が気付かれた、ということでしょうか」

「そうみるのが妥当かな。まあ、うちがベータを攻撃することはないと思っているだろうから、作戦は変えないだろうけど」
「ベータの下位部隊も情報局に任せて大丈夫でしょうか」
「いいよ。情報戦にはならないと思うから、僕らの出番じゃない」
「情報局に一任します」
「了解」
「アルファの動きはどうですか」
「アルファ国はシールド外に動いていない。アルファはベータを犠牲にするつもりかもしれない」
「第二国としてのみ存在する国、ですか」
「ベータの政はすべてアルファで決定される。いわば、ベータはアルファの兵でしかない」
「声交代が漏れた時期から、ベータ数千の本陣が現れた一時間前までのシールドに流れる情報を探ってください。出入りが穏便なものであれば、そのままハッキングを続けてください」
「シュに任せよう。きみの作ったプログラムなら欲しい情報を言わずに手に入れるだろうから」
そう言って、一瞬、オウリュウの気配が消える。
「ベータ国をなくしてまで欲するシーグル……オウリュウ、シーグ

ルの内国状況はわかりますか」

「少しなら。といっても、本当に少しだよ？あそこの保護膜は鉄壁なんだから。アイツに言われて何度か飛び込まされたけど、瀕死の状態で戻ってきてもほんの一瞬の映像しかとれなかったから散々言われたんだよ、まったく、人の苦労ってもんがわからないのかな、アイツは……」

「あ、いつ？」

「そ、アイツ。でもトリコのためなら秘蔵の映像も映してあげる。じゃ、少しだけ戦況の情報の流れを止めるよ」

『流れを止める』、そう言われてトリコは知らずのうちに肩の力を抜く。

「数秒だけどね」

嬉しそうに、オウリュウは言い、同時にトリコは目を見開いた。

「――――――え！？」

新緑が眩しく道を染めていた。

同じように輝く金色の太陽が二つ空に昇っている。
太陽は空まで高く聳え立った銀色の建物に、絶え間なく光を注ぐ。
辺りには人気がなく、けれども人の声が聞こえた。
小さな子供の沸く声、赤ん坊の泣き声。
若葉が芽吹き、道端には白い花々が満開に咲いていた。
どこまでも――――――。
夢の中に存在しているような場所。
たとえば。

天国という名の『平和』。

「シーグル、シーグル軍本部付近の映像だよ」
「……し、ぃぐる……」
弱々しく呟き、同時に体の力が抜けていった。
「今のは……」

「トリコ？大丈夫？」

「あれが……シーグ、ル……だって、言う、の……？」

同じように戦火に巻き込まれる国。

王龍と同じ時期に作られ、育ってきたはずだった。王龍には緑が少ない。美山の華街ですごすそのひとときだけが偽物の平和であるように。笑いはそこらかしこにはなく、誰もがどこかに闇をもつ。

太陽が昇っても、偽りの笑顔は消えず、闇が訪れて闇に引き込まれる人々をトリコはたくさん見てきた。そこが『美山』という特異な場所だからなのかもしれない。

けれども。

「シーグル」

何が違ったのか、その国は緑豊かに、人々は笑い、子供は目を輝かせて生きている。泣き、笑い。

ただ、単純なことなのに。

ザワリ、そんな音が体の中に吹く。なにかに焦り、そしてもどかしさを感じ、そしてなによりも。

恐れを。

あれが『国』なのか。

「この空間内から強制排除。シーグルの映像をロック。パスワードは……完了。以後、僕の命のみで開錠とする」
オウリュウの淡々とした声が遙か遠くで聞こえた。
「同じように進んできたはずなのに、どの国も」
だからどの国も求めるのか。
だからどの国も向かうのか。
その秘密を知るために。
みな、この世界に生きている者たちは、ここまで疲弊しているのか。
「世界はここまで進んでしまっていたの？」
答えを求めず、自分に向けて呟く。
目を開けているのに、その先には闇で。いつの間にか消えた美しい緑を保する国はなかった。
誰もが、欲するのは。

緑豊かな。

求めているのは。

目尻に温かいものを感じたが、随分昔に枯れてしまったそれは流れるはずもなく。

「みなが求めているのは、当たり前で、だけど」

その先を口にすることは出来ない。

その代わりに言葉を体の中で消化した。

豊かで平和な国を求めていて。

戦火はなくならず、国も民も疲弊するばかりなのに。

世界は。

知っていて続けるのか、それとも。

知らずに進むのか。

「無理矢理に求めては同じことを繰り返すだけなのに」

何百とあった国から残った、たった5国。そのうちのひとつだけがみなが求めている『楽園』を手に入れてしまったがために。

「……わたしがここにいるのは」

重く、暗い圧力が体にのしかかる。

「トリコ、戦線情報を流すよ。ごめんね」

悲しそうな声がしてオウリュウの姿が消える。トリコははっとして周りを見渡すが、一気に止まっていた時間中に溜まっていたシーグル、ベータの状況が流れ出し、記号が押し寄せてきて眩暈を起こした。

「オウリュウ」

呼びかけにもオウリュウは応じなかった。けれども淡々と情報は送られてくる。

「オウリュウ、わたしは……」

つながる言葉をトリコはもっていなかった。言いたいことはあるのに、それを口に出してはいけないような気がして。

取り巻く鈍い空気を切断するように、トリコは自ら目を瞑った。

知ってしまった真実を葬るために。

闇しかなかった。

「今は、コトリを」

目を開ける。

「コトリ」

同じ顔をした片割れが元気よく手を振った。

「オウリュウ。シーグル、保護膜に接触します。ベータ下位部隊及びシーグル前線の対応を全て情報局に任せます。これより、シーグルへ向かいます」

それは『先手』。

「たどり着かなければいけない。誰よりも早く」

目を開けてもそこは一色素の闇の空間でしかなかった。けれども、目を閉じた先にあるのは孤独しかなく、それよりも声を発することのできるこの闇の方がトリコは落ち着けた。

強い声に導かれるように、恐る恐るトリコの隣にオウリュウが白衣正装で立った。見る方向は同じに。もしかしたら、オウリュウは最初にそれに気付いていたのではないか、そう思わずにはいられないほどに。

けれども、それを口にしてしまうことはできない。

オウリュウはあまりに純粋に『求める』ことしかできないのだから。

責めるべきはオウリュウではない。

「了解。シーグルの情報網へ進む。これより王龍、メインサーバ、オウリュウは『朱』の指揮下となる。情報局各員を全員配備、オウリュウのサブサーバ開放」

今までだったら声に出さずに淡々と進めたであろう作業を、オウリュウはトリコの隣で声に出した。

「オウリュウの核をこれより『朱』と名する」

『朱』。と。

するりとオウリュウから出た言葉に、トリコはもう慌てなかった。

「我々は、王龍帝のために」

オウリュウは最後に告げ、トリコに向く。

「朱。僕はきみのためだけにいる」

目を細め、オウリュウはそっと呟く。

「何があっても」

「はい」

トリコもまた、前を向いた。

闇しかなかった空間に、朝焼けの混じる橙色の空が映っていた。
上も下も果てなく続く空間は橙色に染まっていた。
無機質な空間は果てない橙に。

「きみがここに戻ってきた。それだけで、僕はこの身をもし滅ぼそうとも、きみを守る」

オウリュウはあどけなさを残す顔をトリコと同じ方向へ向けた。
誰にも聞こえない声で。
人々はそれをノイズというけれど。

「おかえり、僕の朱」

きみがここにいる限り。

「第一保護膜の情報を送ってください」

トリコの凛とした声が橙色に染まった空間に響いた。

13．最速の蝶

また、何かを失うならば。
私にどうか呪縛を。
生きている限り、そして、死んでも。
私は地獄を歩いてく。

黒く長い髪を弾ませながら、トリコはできる限りの速さで走っていた。

永遠に続く黒い闇。まわりにはなにもなく目印さえないその空間で唯一道しるべとなってくれるのは、数メートル先をふわりと浮くように走るオウリュウの朧に光る体だった。

ふたりが走る空間は各国を張り巡る情報のラインで、現実であって非現実、いわば仮想空間の中。その先は4つしかなく、いつかは各国が作った防御壁ともいうべき保護膜に当たる。

ふたりが向かうのは敵国シーグル最強の砦、シイが守る『臨海線』。

「ああ、波形が変わった」

オウリュウのそんな呟きにトリコの背中を冷たい汗が一筋流れ落ちた。

「シーグルですか」

「うん」

そっけなく即答して、オウリュウは勢い良く振り返る。

「大丈夫だよっ！トリコには僕がいるんだからっ」

どうやらトリコが感じた不安に一瞬にして気付いたらしい、オウリュウは慌ててトリコの側に戻ってくると、手を取り、下を向いたトリコを覗き込む。

「トリコ。心配しないで。僕はシーグルの臨海線になんて負けないよ」

「ええ。オウリュウ、あなたが負けるとは思っていません。負けるとするならば……」

その先に触れず、トリコは言葉を濁して顔を上げ、いつものようにコロコロと笑う。

「まだシーグルの範囲に入るにしかすぎないんですね」

「うん。実際にシップに乗って行ったら一日以上はかかるし。それに今、トリコが感じている時間の感覚はずれているはすだよ。実際の時間にしたら十分もかかっていない。僕らはなによりも早く戦線

を駆け抜ける」

（１０分程度……早ければ前線に動きがある。）

「ベータは、」

言いかけている最中に、トリコの目の前に濃い灰色の空間が広がった。

その中に無数に朧に浮き出ている滲む光。

「ベータの前線、まだ待機中のようだね」

目をこらしていると、無数の朧な光は時々、左右に微量に移動した。それがベータの軍機であるとわかってトリコは眉間に皺を寄せ、広がる光景を見つめ直した。

（多い。）

「史上最高の軍機の数だね。数打てば当たるとでも思ったかな」

「ベータの戦力であの数いれば、シーグルは堕ちますか」

「無理だね」

オウリュウは端的に即答する。

「シーグルは数じゃない。力じゃない。頭だ」

「……能力」

「シーグル最強軍を指揮するシイは回転が速い。攻撃を受けている最中に次の指示をしているとしか思えない反撃のスピードだし、まあ……確かに威力はあると思う。だけど、向ける規模が違う、数打てば、じゃないよ。的確に適所に最小限の指示でダメージを与える術を知っている」

「前回の声交代時から指揮をとっているはずでしたね」

「さすがに時間はかかっていたけれどね。あれは才能だ」

トリコは向かう先を改めて思い知る。

「だけど」

オウリュウは声色を変えて、そして口元を緩める。

「僕たちが向う相手はシイじゃないからね」

「え？」

「シイの情報戦対応部隊でしょ。シイはプログラムにまで手は出さない。出撃許可を出すとしても、その先の組むプログラムに僕らが負けなければいいだけ」

視界に薄らとにじむ光がにわかに増える。

（オウリュウ……簡単に言ってくれるけど……。）

トリコはさらに眉間に皺を寄せる。

「トリコは僕に直接指示をしてくれればいい。それで、僕は今まで以上の速さで正確に動ける。それが王龍が求めてきたもの」

「求められても困ります」

オウリュウは「あはは」軽く笑って、振り返る。

「トリコ。空にさえ、空間であれば僕達はどこにでも存在する」

「それが他国の中であろうとも？」

「もちろんだ。それがきみの願いなら尚更ね」

トリコはオウリュウが満足気に言った言葉に頷いた。

「わたしは誰よりも早くシーグルへ行かなければいけない」

（コトリのために。）

「トリコ、ベータの前線に監視を付ける？」

「はい」

（そして。）

オウリュウはぶつぶつと記号を呟いている。

この世界を終わりにしなければ。

「ベータの指揮官の機に付加をつける。オウリュウをベータラインに接続……カウント、１０、９、８……０、接続。ダミー情報付加、１、２……でいいっか……気付かれても大した情報搾取してないから追撃はされないだろうし」

オウリュウは独り言を交えながら淡々とトリコを気にすることなく事を運めていく。

「すぐにオンラインにできるんですね」

「『戦線の状況を見るのに一番見やすい場所を確保します』程度だから、簡単に言えばカメラを一番見やすい席に設置するって感じ。だから大した作業はいらないし、そもそもベータはそんなに守りが固くないからね。まあ、ウィザードほど弱くはないけど……」

何を思い出したのか、オウリュウは明らかに呆れた表情でため息をついた。

「あれは……ひどかったな……トリコにも見せてやりたかったよ」

「はい？」

「あまりにひどいプログラムで僕と応戦して、こっぴどく負けたウィザードの話。あ、うん、いや、気にしないで」

オウリュウは一通り嘲り笑うと無造作に肩幅程度に両手を広げる。

「オンライン」

トリコの周りは暗闇の空間に戻っていた。

「これなら情報を僕と常に共有できる。まだきみの頭に直接映像を流すのはやめておくからね。さっきみたいになられたら大変だ、こんなことで」

シーグルの映像を流したとき、トリコが違う時間の流れに吸い込まれたことを言っているのだろう、オウリュウはそっと最後に呟く。

「少し動きがあったようですね」

視界に明らかに増えた光があった。

「アルファのシップが数機到着したみたいだね」

「ベータに指示を与えに、ですか？」

「いや、最終的に指揮はアルファがとる。たぶん、その指揮官がアルファの指示を持って到着したんだと思う。ベータはアルファの兵でしかない国だからね」

「……動きますね」

「今回の司令が固まった。来るよ。もう待つ意味はない」

オウリュウは静かに告げ、闇に向き直る。

「第一、第二保護膜までは解読できている。そもそもベータはすでに第二保護膜まで進行しているところを見ると情報膜にも先客がいると思う。行こう、恐れることはない」

強く握り締められた手をトリコは不思議に思う。

自分より華奢な指に込められた、実在しない力。オウリュウはこの世界で時折会いに来る『アイツ』だけを現実の世界との接点として、きっと、ずっとひとりで生きてきた。

だからこそ、彼は新しい存在を喜ぶ。

トリコはそう思っていた。

「第一保護膜を突破します。接続開始」

「了解」

淡々と仕事を進める少年の背中を見つめ、トリコはふとオウリュウが発する言葉が自分の解さないものであることに気付いた。

気づいたと同時に、その言葉は自分の中にちゃんとした言葉として聞き取ることができた。オウリュウが全て変換しているのだろう。

（オウリュウ。）

ひとりで待っていたのだろうか。

「ダミーが三本と……情報量がまともじゃない。トリコ」

「はい。こちらもダミーを作成。情報の流れを一時的に吸収します」

「ダミー三本は？」

「今まで見たことがある解読法の他はすべて無視します」

「了解」

オウリュウの目の前にあるはずもない金色の無数の光が点滅していた。そこをオウリュウがひとつずつそれでも人の目に判断しかねるほどのスピードでタッチしていく。

「光っているのが情報だよ。細かい、どうでもいい情報。撹乱するためにあって、流れている情報のうち、必要な記号だけを拾って組み立てると一瞬、隙ができる。それで僕らは進む。これってね、どの国もそれぞれ保護膜に情報を流しているけどシーグルは桁違いなんだ。だからなかなか突破できないんだよね」

「シイの情報部隊が作っているんですか？」

オウリュウは振り返ることなく、作業を止めることなくあちこちで点滅し続ける小さな光を触り続ける。

「いや、シイは常時いるわけじゃない。だから、シイが連れている情報部隊は戦線になったとき用」

「じゃあ、この情報を流しているのは……」

「シーグル国を管理しているところだから……峰岸静だったかな。だけど、ちょっと気になることもあって」

「気になる、こと？」

一瞬、オウリュウの手が止まる。

「オウリュウ」

「王龍軍の情報局がベータのオンラインにつながった。僕たちと違う回線だ……」

トリコはオウリュウが目を瞑り探るような姿勢を取ると、隣に進み出た。

「ベータ本国ですか」

オウリュウから返答はない。

「位置は……ちっ、ブロックかけてるな？トリコ、どうする？」

「王龍から作戦の通達は？」

「僕には何も指示されない」

「それでは、オウリュウ、回線先と内容の確認を」

「自国にハッキングってこと？」

「知る必要性があるかどうかではありません。あとからでは遅いのです。悠長なことは言ってられません。わたしたちと違う回線をわざわざ使うってことは、どうせよからぬことを考えてるに違いない

んですから」

言って、ふとキツネの不敵な笑みを思い出した。

（……キツネ……もし、キツネがこの国の『阿、吽』のひとりだったら。）

ふと思い、トリコは身震いした。

ついでに頭を大きく振る。

「……お、恐ろしい……」

「トリコ？」

「いえ、ちょっと嫌な予感が痛烈に……両方同時でも大丈夫でしょうか」

オウリュウは満面の笑みでこたえる。

「当り前でしょ」

再び目を閉じて集中してしまったオウリュウの後ろで、トリコは用意されたベータ前線の様子を見る。それしかやることがないのが実際のところで、トリコは次の考えを巡らせる。

（シーグルの情報操作をしている者。）

「第一保護膜突破。第二保護膜へ移る」

「はい」

「歪みができている。シーグルの保護膜をアルファかベータが強引に突破して、強引にふさいだみたいだ」

「王龍とベータの記録は」

「もう少し。ちっ……アホでも一応、成り上がりなだけあったか、タカツキめ」

（タカツキ中佐が作った暗号……。）

「わたしが変わります、オウリュウ」

「え？」

オウリュウは目を開き振り返る。

トリコはすでに黒髪を揺らしオウリュウの隣に立っていた。

「大丈夫です。人が作ったものにはひとの癖があります。第二保護膜突破を急いでください」

「了解した」

トリコの目の前にキーボードが現れる。

「こっちのほうがやりやすいでしょ？」

オウリュウは楽しそうに言って、トリコの返事を待つ前に目を閉じた。さっきまで目の前に広がっていた無数の光は消えている。

（オウリュウの中で情報処理がされている。見える必要はない、そ

ういうこと……）

トリコは目の前に出されたキーボードに目を向けた。
ラインはどこにつながっているのか、視線の先で闇に吸い込まれて消えていた。

（タカツキ中佐の作りそうなプログラム……。）
脳裏に広がった無数の記号を構わず打ち始めた。

「コトリ、今、行くから」

吸い込まれるようにトリコは意識を手放した。

コトリ……が戦っている。

険しい顔をして、コトリがひとつに纏めた長い黒髪を揺らして剣を振るう度に、白衣の裾が舞った。

色白の肌はすでに誇りにまみれ、彼女の頬からは真紅の血が滲んでいる。

映像は揺らぎ、そしていつか砂嵐にかき消された。

コ、トリ……

胸が痛かった。

間に合わない。

また……また！

トリコは必死に砂嵐の中に一筋の光を探す。けれど、もうその光景につながる様子も見られず、両手を血が滲むほど強く握りしめた。

息を吸う。

そして、出なくなるまでゆっくりと吐く。

違う。

わたしは、まだ諦めない。

頭を上げた。

闇。

第二保護膜の戦場。

王龍の先発隊の映像だった。トリコはふと意識を遠のける。

その思いのまま映像は、遥か上空から見下ろすような位置に切り替わった。

シーグル。

二色がその一色に向かって蠢いていた。

白衣は『王龍』。

赤衣は『ベータ』。

そして、みえる限りに対するは、一色素の青、『シーグル』。

トリコはその光景を目を閉じて消し、再度、頭に次々と浮かぶ記号と符号を迷うことなく打ち込んだ。

「あった」

トリコはキーボードから手を離す。

戻ってきた意識にトリコは息を吸い、手から離れたキーボードがすでに跡形もなくなっているのに気づいて視線を上げた。

黒い髪、色白の肌、それに似つかわない青い目をした少年がほほ笑んでいた。

「よくやったね、トリコ」

「オウ、リュウ」

両手を取るとオウリュウはトリコを立たせた。同じような背丈だった。

「おつかれさま」

オウリュウはそのままトリコに抱きつく。華奢な手からやさしい温もりがトリコの背に広がった。

白衣に黒髪が広がり、トリコはオウリュウの後ろに現れたスクリーンのような囲いに映し出された大きな文字を見上げた。

「……まさか」

「どうやら、僕らはあいつにいいように仕向けられたようだね」

今までで一番、やさしい声色で。

「オウ……」

「第二保護膜のロックを外したよ。もうすぐ、来る」

「避ける術を」

トリコがそう言って、オウリュウは綺麗な顔をそっと横に振る。

「まさか、この僕が使われるなんて思ってもみなかったよ」

どこまでも優しく、誰に非難を向けることなくオウリュウは言う。

「『オウリュウガダイニホゴマクヲヤブリシダイ、バグヲトウニュウスル』」

確かにそれは王龍がベータに向けた協力の司令だった。

とにかく、シーグルを破るために。

「い、やです」

自分の耳を疑うほどの情けない声は、間違いなく自分の口から出たもので。

「バグはすでに作られていた。そして、僕らが第二保護膜までくることは決まっていた。ふたりで。それはふたりでなければならなかった」

オウリュウはトリコを離そうとしない。

「道を敷いたものは引き返すしかない。途中でバグの波に壊されてしまう。ひとりでは自滅しかない。だけど」

「いやです」

トリコは無心に頭を振る。オウリュウの言葉なんて聞きたくもなかった。

「時間がない、トリコ。餌食になるのは僕であればいい。計画どおりっていうのがしゃくだけど。きみにはちゃんと体（実体）がある。僕がこのラインからきみを切り離せば……」

「いやですっ！」

そう叫んで、今度はトリコがオウリュウの体を強く抱きしめる。

「一緒に、シーグルへ」

「それは無理だよ。バグは来る」

「オウリュウ」

「僕はいなくなるわけじゃない。少し休養をもらうだけだ。いつかまた、きみの前に立つ」

「オウリ……」

トリコの体をそっと離しオウリュウは頬に触れる。青い目が優しく微笑んでいた。

「待ってて、朱」

「王龍」

流れるはずもない涙がトリコの両目を伝ったようだった。熱い、しずく。

「泣けない鳥はいないんだよ、朱」

「王……」

その意味を聞き返そうとして、オウリュウはトリコをそっと離す。

「シーグルの臨海線に到達しないなんて、こんな馬鹿げてることはないな」

いつものようにしっかりとした口調で、いつものように呆れたよ

うに。けれど今度は自分に嘲笑を向けて。

少年は前を向く。

「ひとつ、僕は賭けに出るとしようか」

今度は楽しそうに。

「僕を貶めるなんて、人類生きている限り、あってはならないな」

「王龍？」

トリコは立とうとして手を動かそうとする。けれどその手はもどかしいぐらいに動かない。

「王龍！」

「ごめん、きみはこのままだと無理にでも僕についてきそうだったから」

「当り前です！」

「きみが他のふたりにいったことをそのまま返すよ、『僕がもし死んだら、追いかけないで』」

白衣の裾がふわりと揺れる。青い目は優しく微笑み返していた。

「僕はこれからシーグルへ行く」

ふわりと動かないトリコの体をオウリュウは覆い、離れた。呟い

た言葉にトリコは目を丸めて手の届かない高さに上がったオウリュウに視線を向ける。

「バグを知らせるために。それがきみのしたかったことでしょう？」

「……なん、で」

「シーグルを他の国に渡さない。シーグルはシーグルであるべきだ。シーグルを諦めたとき手に残るものにきみは賭けてみようとしたんでしょ」

「……自国のみでもできるあの未来を」

トリコはシーグルの光景を思い出していた。

緑豊かな、『平和』の姿。

「僕は王龍を愛している」

「そして、きみも。朱。さよなら」

「――――――――お、オウリュウっっ！！！！！！！！」

オウリュウは消え、叫び声の先へ向かって大量の記号と符号の波が走り抜けて行く。

同時に。

真空になった空間の先に金色の光が溢れ、そして何かを判別する間もなく、突風と金色の光がトリコに向けて駆け抜けていった。

ああ。

なんて、早いんだ……

畏怖でも恐怖でもなく、それはただ恐ろしく綺麗な金色の世界だった。

トリコを避けて金色は駆け抜けて行く。

見たこともないような大量の打ち返すために発生させられた金色のバグが、トリコの背後にあるベータとそして、王龍に向けて流れて行く。

トリコは瞬時に知る。

シーグルの情報の波が、ベータと王龍が作ったバグを打ち返したのだと。

ジジ。

そんな短音と、一時的な砂嵐を残像としてトリコは意識を吸いこまれた。

瞬時に負けたのだと、知った。

「トリコ、トリコッ！」

知った声。大きな角ばった手に背中を抱きしめられているのを感じて、トリコは薄らと目を開ける。

「トリコッ！！」

慌てて、今まで見たことのないような泣きそうな顔があった。

「……うっとおしい。シッコク」

小さく声を発するとシッコクははっとして顔を遠ざける。

「負けました」

トリコの声にシッコクは目を見開いた。

「王龍は今回の戦いに負けました。そしてベータも、アルファも。ウィザードはもう仕掛けないでしょう」

体中から力という力が抜けていた。どうも、立てる気もしない。

「王龍はオウリュウメインサーバを失いました。タカツキ中佐は？」
「情報局から通達があって、ずいぶん前に出て行ったきりだ」
「しばらくはこっちに手がまわらないでしょう、そろそろシッコク、あなたもこの空間にいては体が危ない。お願いがあります」
「なんだ」
「わたしを美山へ」
驚いて目を丸くするシッコクに、「お願いします」トリコは目を伏せた。
「わかった」
シッコクはそれ以上何もいわずに、暗く冷たい空間から小さな少女を抱き上げると、部屋を後にした。
大きながっしりとした腕の中で、トリコは久しぶりに眠りについた。

13．最速の蝶（後書き）

……長い？

１４．贖罪

私はひとりで生きていかなければいけなかった。

わかっていたのに、求めていた弱さは、これからも償うべき罪。

見慣れた天井、息遣い荒く目を覚ました。

「また……」

呟いて、その現実を受け入れる。部屋は隅に置かれた行灯の木漏れ日程度の光に包まれ、壁に映る自分の大きな黒い影に目を細め姿を確認して、息を整えた。

「わたしは生きている……」

決して安堵の言葉ではなかった。

「すみません、シッコク」

気配さえ感じなかったが、とりあえず口にしてみる。たぶん、彼はいる。そう確信して。

「体を起こすのを手伝っていただいてもよろしいですか」

存在なき姿。彼はすぐにトリコの背中を支えた。

「ありがとうございます」

「眠れないのか」
こちらもまた責めているわけではない。トリコの背中にそっと薄い衣をかけると、大きな体を布団の隣に寄せた。

「美山はいかがですか？昼間は随分と姐さまたちと楽しそうにしていたようですが」

「あっ、あ、あれは、その……」
大きな体格に似合わずシッコクは口の中でもごもごと何か言い、しまいには顔を染めた。そんな様子のシッコクにもトリコはいつものような呆れも浮かばず、ただそれを見つめた。

「ト、トリコ」
何度か呼ばれ、肩を軽くゆすられ、トリコはやっと自分を呼ぶ声に気付く。

「あ……ああ、シッコク、わたしのことは気になさらず先に眠ってください」

障子を隔てた廊下でいつも腰に差す刀を両手で構え、軽く浅い眠りについているだろうことは安易に想像できた。いつのまにか、唯一、トリコのそばにいることを覚えて。

「わたしも眠れん」
まるで用意していた答えのように、迷いもなく憮然と言ったシッコクにトリコは目を丸め、そしてふと口元を緩めた。

「シッコク」

「な、なんだ」

不器用に言葉を紡ぐシッコクに、いつかトリコは安堵を覚えた。シッコクはどこまでも忠実に、そして真実のみを信じることができる、己の強きをもった男なのだと悟った。

短い間だというのに、すべてを知り、最後まで自分をかばった『オウリュウ』と同じなのだと。

「あなたがいてくれなかったら、わたしは王龍美山支部という要塞からここまで戻ってこれませんでした。そのうちここにも王龍からの追っ手はくるでしょうが、タカツキ中佐はまだダメージを受けた王龍メインサーバ、オウリュウにかかりっきりでしょうから少しは休めるでしょう。お礼を言います」

「トリコ」

少し考え、シッコクは不思議そうに向き直る。行灯の中で空気が震え、橙色の明かりが部屋で揺らいだ。

「なんでしょう？」

「あの、どうも機械はわからんのだが」

「はい。わたしもそんなによくはわかりませんよ。あまりにノロマだったので、たまたま情報局に追いやられただけですから」

「おれは生れてこのかたこれだけだ」

誇らしそうに愛おしそうに脇に差した刀を見つめ、そして視線を戻す。

「おれのことは」

「すみません。この体になってすぐ、あなたと、そしてタカツキのことは調べました」

少し動揺したように目を揺らがせ、シッコクは納得したように頷く。

「当り前のことだ。お前の身に起きたことは、ひとりで処理するには多すぎる」

シッコクはそう言って、体を崩す。トリコの横に無防備にも大きな体を横たえ、大きく息を吸った。

「し、シッコク？」

「少し安心した。少し休ませてもらうぞ」

今までの緊張を解いたように砕けた口調で言い、シッコクは仰向けに畳に寝転がる。そうしてみれば、シッコクもただの民のようだとトリコは思う。

「安心、ですか？」

「……調べた、ということはおれがやってきたことも、そしておれの生業もすべて知ってるんだろ」

トリコは声に出さず肯定の意味を含めて頷く。

美山の置屋を出てすでに一週間経っていた。
けれど、シーグルとの戦いが始まったことを知っていた姐さんたちは暗黙のうちにトリコのことも了承していたのだろう。シッコクの両手から寝ぼけ眼を覗かせると、キヨハルは客の接待をほったらかしに飛んできた。

『大切なトリコ、おかえり』

キヨハルはそれだけ言って、シッコクの両腕からトリコを抱きかかえる。

トリコの鼻腔にふんわりと花の香りが浸みて、無意識のうちにキヨハルの首筋に額を付けた。

白粉と花の香。

それだけだったけれど、トリコはやっと帰ってきたのだと安堵の息を漏らす。

だらりと下がった両手は動かない。キヨハルは何も言わずにトリコを部屋にそっと寝かせ、笑みを浮かべた。

『少し休みなさい』

それが誘発剤だったかのように、トリコは何も考えずに瞼を閉じた。

けれども。

香りが遠のくと目を覚ました。

『コトリ』

トリコのもとにいち早く飛んでくるのは彼女だけのはずだったのに。

負けた戦場から、彼女はまだ戻らない。

一日経った。

二日目、シッコクが置屋で姐さんたちに囲まれてしどろもどろに遊ばれていた。

太陽が昇っている間は置屋の外で同じ姿を探した。

日が暮れ、置屋に隣接したキヨハルの仕事場に灯が灯ると、部屋で障子だけを見つめた。いつ、帰ってきてもいいように。

けれども、いつもの騒々しい足音は聞こえなかった。客の笑い声が、そして姐さんたちの笑い声が聞こえるだけだった。

トリコが置屋に身を寄せることを了承するために、シッコクが姐さんたちの用心棒を引き受けたと聞いたのはその晩のことだった。

夜中、キヨハルが戻り、微笑み、そして残り香にトリコの部屋が包まれると、トリコは目を閉じることができなくなっていた。

明日は戻るだろうか、戻るはずだと。

コトリは、そしてリクオウは。

そして――――――――。

「王龍帝の勅命を受ける暗殺者と」

シッコクは研ぎ澄まされた黒い瞳をトリコに向けた。それを迎え撃つようにトリコもまたシッコクを見返した。

「まっすぐ見るんだな」

「オウリュウメインサーバーのオウリュウから得たものは真実です。彼はわたしに嘘は言いません。わたしにだけは」

あどけない顔つき。けれどいつも彼は真実を体に宿していた。

だからこそ、まっすぐに純粋に、優しく。

「そうか」

シッコクは声を和らげる。シッコクはオウリュウのことを知らない。けれど、オウリュウがトリコにとってこの短期間にどういう存在であったかはわかっているようだった。

「おれはいままで何十人もの帝に贖う者たちを倒してきた。タカツキが『いまさら、なにを』と。まったくだ。その通りだ。この体は他人の血でできている」

シッコクの体を包む黒衣が震えていた。トリコは淡々と言うシッ

コクの姿を見つめていた。

「おれも生まれてすぐに王龍軍に売られ、そして育てられた。暗殺者として。たくさんいた子供たちはいつのまにか一人消え、そして二人消え、そうしているうちにいつか周りにひとはいなくなっていった。それでも何も感じなかった。それだけが生きていく術で、それでも生にしがみつく自分は当たり前の姿だと」

「当り前です」

はっとしてシッコクが体を起こすとトリコはリンとした声でシッコクを迎えた。

「ひとはなにも死ぬために生まれたわけではないのです。わたしもあなたと同じ。生きるためなら何でもしましょう」

「だが、お前は」

「ええ。わたしは、その生がコトリにのみ存在している」

「コト、リ」

「姉です、一応。どう考えても妹のような存在ですが」

（あの落ち着きのなさは、姉とは思えない……絶対、お産婆さんが間違ったんだ）。

コトリが泥だらけで、それでも嬉しそうに部屋に走り戻ってくる姿を思い浮かべた。

涙目でリクオウに怒られるコトリは真っ赤な顔で反論した。

（いつも負けるけれど）。

けれど。

いつもコトリは同じ小さな体をトリコより少し前に出して、両手を広げた。

トリコは動かないもどかしい自分の両手を想う。

けれど。

いつもコトリはトリコより早く動いた。考える間を惜しむように、トリコを守るために。

いつも、いつもコトリは小さな体を精一杯、トリコとコトリに向けられる敵意からかばうために。

そんなコトリを守るはずだったのに。

なのに。

目の奥に熱い液体が溜まったようだった。

けれどトリコはそれを知らない。

目を伏せ、そして振り返るコトリの笑い顔を想った。

（コトリ）。

「トリコ」

優しい声がして、それでも不器用な声がして、トリコは顔をあげる。

「大丈夫だ、コトリはお前の元に戻ってくる。それまではお前がここを守らなければいけない。あいつらもわかっているはずだ。お前はお前のことを少しは労わるべきだ」

憮然と言い、シッコクは再度畳に横になった。

「シッコク」

「コトリが戻ってきたら、お前にはわかるんだろう？だったら目を閉じていても変わらない」

「シッコク」

それでも名を呼ぶとシッコクは面倒そうに体を起こし、そして布団の上に起こしていたトリコの体に太い腕を寄せる。

「え？」

ぐらりと体が揺れ、布団とはいえど固い畳に当たる衝撃を覚悟し目を閉じる。

「できるだろ、目を閉じるの」

同時にトリコの背中を支える大きなかくばった手。そっと布団に寝かし直され、トリコにふわりと掛け布団がかけられる。

「おやすみなさい」

照れたような慣れない言葉にトリコが目を開ける前に行灯の光が消される。そして隣で大きな体が横たわる音が耳に届いた。

「ふっ……」

久しぶりにトリコは声に出して笑う。

「笑うな」

「すみません、手で口を押さえられないのっ……ふっ……似合いませんね、シッコクが」

「はーやーく、寝ろっ！」

暗闇でも隣でシッコクが耳まで赤くしている姿が想像できた。

「――――――おやすみ、なさい。シッコク」

返事はなかった。けれど、トリコは少し靄が晴れたように眠い、

それでも浅い眠りにつくのだった。

朝起きるとシッコクの姿はなかった。
トリコは何も夢を見ずに眠れた数時間をシッコクに感謝しながら、上半身に力をいれて起きる。昨日寝る前にキヨハルが出してくれていた普段着の着物に袖を通す。
口で前紐を簡単に結び、トリコは棚に体を押しつけながら立ち上がった。
畳にはすでに日差しが差し込んでいる。

「……おはようございます、コトリ。――――――……シッコク」

全く気配がない。気配がないなりにいるかと思い、名を呼ぶがやはりシッコクはいないようだった。

（なにか……）。

不安が過る。

（起きたのだろうか……）。

「まさか！」

障子を開ける時間も待っていられず、トリコはそのまま肩から障子の扉に飛び込んだ。

「――――――う、きゃっ」

もちろん肩から勢いよく廊下に倒れこみ、同時に障子の扉は大きく破損した。廊下の先の雨戸に頭をかばい背中から当たる。

廊下はそこから先は雨戸が開けられ、中庭に直面している。寝ているトリコを気遣って雨戸を閉めておいてくれたのだろうが、今は中庭まで飛ばなかったことに感謝しながら、トリコは壁づたいに体を押し付けながら立ち上がる。

「まさか、タカツキが……」

（キヨ姐やおかみさんに迷惑だけはかけられない）。

やっと立ち上がったところで、薄暗い廊下にどきっとした。

「――――――あ、ああ……」

今まですごした置屋は、色彩に偏りをもったトリコにとって、不安を過らせる。

「……色がないというのは、こんなにも」

目を細め、先を見つめた。

（……視界はどうにかなるから、いいとして。早く、行かなければ）。

静まり返った置屋の中に、トリコは足を踏み出した。
が。
「――――――――――――トリコちゃんっ！」
張りつめた声。
バタバタと物々しい足音に一瞬気を取られ、そして角から現れたその存在に目を見開いた。
「トリコ！」
「トリコちゃんっ」
（――――――これは）。
トリコはその場にまた腰をおろした。
角から現れた青年はトリコを勢いよく抱きしめると、いつもは手にしないようなすらりと長い刀を、盛大に破損した障子の先へと向ける。
背中にまわされた片手は強くトリコを抱きしめていた。
（――――――どういった、こと……？）。
「今度は、誰にも」

強くはっきりと言った言葉にトリコはさらに目を丸めた。
声が出ない。
「怪我は？」
いつもとは違う声色。張りつめ、そして厳しい。トリコはその白衣の肩越しに見えた漆黒に目を移す。一番後にゆっくりとやってきたシッコクは、厳しい顔で辺りをうかがい、白衣の中にいるトリコと視線を併せ異変を問う。
「怪我はないの？」
だらりとたれた二本の腕。トリコは小さく頭を振ることしかできない。
「よかった」
「何があった」
何も気配がないのを不審に思って、シッコクはさっさと近付くとトリコが体当たりして突き破った障子に目を移す。
「トリコちゃん」
柔らかな黒髪がトリコの頬を撫ぜる。
線の細い華奢な体だと思っていた体躯は、思っていたよりずっとしっかりしていた。やはり白衣がだれよりもしっくりと似合う。
「トリコちゃん？」

片手に握っていたスラリとした刀を廊下に置き、抱き寄せていたトリコを顔が見える位置に座らせる。

「自分で飛び出したのか？」

「え？」

「いや、他の気配がしない、し。それに――――――」

間違いない人型はトリコの身長を物語る。

トリコは首を縦に振る。

「な、なんで！」

慌ててトリコの着物に付着した木片や紙片を払い落し、起きたままの長い黒髪に触れる。

思い当ったのかシッコクはそれでも呆れたように呟いた。

「ああ、おれのせいだ」

「え！？」

シッコクは言い「起きておれがいなかったから、何か起こったと思ったんだろう？」告げる。

トリコは小さく頷いた。

やっとのことで、再度、目の前で慌てる青年に意識を戻す。

柔らかな黒髪。軍人でないような体躯。誰よりも似合う白衣、王龍軍服。
けれど。
間違いなく、彼は軍人だった。
真横にすぐに手に取れるように置かれたスラリと長い華奢な刀。
手に馴染むようにそれは彼と共にすごしてきたのだと物語る。
張りつめた声は今まで一度も聞いたことがなかった。
けれど。
彼の存在も空気もまた、王龍軍のひとりだと言っている。
脳裏に映し返されるのは、最後に見た青白い顔。
そして、赤い――――――
「血」
儚い短音がその場に響く。
トリコはその顔を見上げた。目を丸め、驚いているのは彼の方だった。
「ソウマ、さん、生きてた」
涙は出ない。
涙は存在しないから。
手を伸ばすこともできなくなった体で、トリコは目の前に存在するソウマを見つめた。触れたくても自分からはそれを容易く確かめ

られない、もどかしい。

「トリコちゃん」

そう言って、ソウマはトリコの不自由な体の詳細を知るかのように、再度トリコを抱きしめる。

「ごめんね」

トリコは優しい白衣の中に顔をうずめる。その声はいままでそうだったように、優しくトリコを包んだ。

「きみを守れなかった。先に気を失うなんて、僕は失格だ」

「ソウマさん」

トリコを目の前に座らせ、ソウマは一歩下がる。優しく頷き、ソウマは微笑んだ。

「ソウマさん。またあなたに会えると思っていませんでした。シッコク」

（すべては、なくなったと、思っていた）。

始まりはソウマの倒れた青白い姿だったから。

滴り続け、染み入る鮮血の赤の光景。

始まりは、目の前に戻ってきた。

「生きていると言った」

「……わたしが意識を失う前にソウマさんに刀が落ちていったと」

「ちゃんと刺さる前に受け止めた」

「……すみません。それで『バカ』と」

「当り前だ」

そこは堂々とシッコクはソウマの後ろに立ち、言う。すでに障子を突き破ったトリコに呆れている様子だった。

「そもそも、シッコクがソウマさんを殺そうとするのがいけないんです」

「無理を言うな。『帝の命』として発令されたら拒否はできない。だが、それは――――――」

「それは済んだ話です。あなたにも、そしてトリコちゃんも。わたしが回避していればこんなことにはならなかった。それだけです」

ソウマはシッコクの言葉を遮るように言い、トリコに向き直る。

「トリコちゃん。僕が今日来たのは、きみに会うために」

「傷はいかがですか」

「さすがに、これにやられた傷はね」

ソウマは苦笑いしてシッコクに目を向ける。

「シッコク、謝りなさい」

即座に言い、トリコはシッコクを睨む。
「人を傷つけてはいけないでしょう？ましてや同じ軍人なのに。ソウマさん」
二人は目を丸めてトリコを見返す。
「ずっと謝ろうと思っていました。わたしのせいで傷を負わせてしまいました。申し訳ございません」
「ト、トリ……」
「シッコク」
「は！？あ……あー……すまない」
しどろもどろに言い、シッコクは頭を掻く。
「シッコクがソウマさんに傷つけずにわたしだけをさらえばよかったことです。ソウマさん、仕事に支障はないですか？もし、こんなことが失態になって降格でもされたら大変です」
「ト、トリコち……降格、というか」
「え？まさか除隊とかですか！？」
「違うよ、僕がわがままを言って元に戻してもらっただけだから」
「そもそも返上していたなんて知らなかったが」
シッコクは呆れたようにソウマを見る。

「僕にあの名は似合わないでしょうが」

「そうか？それはそれで似合ってたと思うが」

トリコの知らないうちに会話が進む。トリコが首を傾げるとソウマは「ごめん」そう言って、さらに一歩下がる。

「戦場の名をもう一度頂戴するために、拝謁してきた」

ソウマはそう言って、手のひらと拳を合わせる。

優しい目が見つめていた。

「あなたに誓う」

衣擦れの音が似つかわない置屋の片隅に響いた。

あたりは静かで、日差しだけが壊れかけた障子と、民家とそう変わらない板目の廊下に差し込んでいた。

胡坐をかき、そして額を床につけ、白い絹衣がトリコの目の前にあった。

「王龍帝『阿、吽』の『阿』を頂戴した」

トリコの目の前で王龍軍最上の挨拶が行われ、そしてソウマは顔を上げた。

決心した表情で、ソウマはトリコに再度、頭を下げる。

「鳥の声を聞くわたしの『朱』」

それは、久しぶりにトリコが聞く『朱』の言葉だった。

15．赤い世界

赤い世界よ、どうかあの子を連れていかないで。

目の前で繰り広げられた光景にトリコは口を聞けなかった。シックは当たり前のように、体を伏したソウマを壁際で見下ろしている。

（なにが……。）

すでに二回目となった疑問を胸にトリコは徐々に眉間に皺を寄せる。

顔を上げ、最初に口を開いたのはソウマだった。柔らかな笑みの視線の奥には、今まで垣間見せることもなかった、強さを宿していた。

王龍を象る昇り龍の脇を固める『阿』と『吽』。彼らは決して姿を見せず、主である王龍帝の為だけに頭を垂れるのだと、今のいままでトリコの中ではそのはずだった。

「トリコちゃん？なんだか不思議そうだね」

「え、は……」

「お前が急にそんなことしたら誰でも驚くだろう。それは軍の正式

な敬礼だ」
意外にもトリコを代弁するのはシッコクだ。
（いえ、それもそうなのだけど……それ以前に恐ろしいことが告げられたような気が。）
「ああ、そうか……」
「おれでも一度しかしたことない」
「なんだって！？いつも帝にはしないの！？」
「形だけでもしろと？そもそもそんな間柄じゃないだろう、大体……」
そこまで二人で言い合って、ふとトリコに一斉に見向く。
「トリコ？」
「トリコちゃん？」
（絶対、仲良しだ。）
さらなる頭痛の種に気を重くしながらもトリコは息を吐いた。相変わらず物分かりのいい、自分の頭に嫌気を向けて。
「トリコちゃん。驚かせてごめん。いままで図書館のソウマだったのに、いきなりきてこれはないかな。だけど、これだけは変わらず誓える」
白衣の袖を上げ、ソウマは優雅に微笑む。

「これは僕の帝の決定だから。だから僕はこれらかトリコちゃんと共にいる。帝はどこまでもトリコちゃんの、朱の味方だよ」

（ああ、そうか。）

漠然と、だけどそれはそうなのだろうと。

『朱』と呼ばれる。それだけで、帝の阿という腹心さえも従えることができる。

（たとえ、わたしが『朱』などではないにしても。）

悟ると同時にトリコは決めた。

目を伏せ、ゆっくりと顔を上げる。廊下の壁に何も意思を含まずただ成り行きを見つめる黒衣のシッコクと、廊下に再度、伏した白衣のソウマを順に見る。

（今は、ひとりでは戦えない。ひとりではコトリを。）

「ソウマさん、顔を上げてください」

三人の他、昼間であっても誰も来ないのは、何かを察しているからだ。トリコは感謝し、二人に聞こえるだけのリンとした声を出した。

「シッコクも、ソウマさんも。ひとつだけ約束を」

（わたしは……『朱』ではないのだから。）

「もし、わたしが倒れるようなことがあれば、わたしのことは忘れ、必ず去ってください。それを誓ってください」

ソウマは驚いたような表情で「え？」声を漏らし、シッコクはあきらめた様にため息をついた。

「トリコちゃ……」

「それが守れないようであれば、即刻、ここから出てください。そして二度とわたしに近付かないこと」

「ソウマ、そういうことだ」

「なっ、んで！？」

「トリコ、お前がそれでいいのなら。誓おう」

トリコは小さく頷いた。

それを見てソウマは納得しない表情で、それでも即座に結論を口にした。

「――――――わかった。阿、として誓う」

トリコはふたりに向け頭を下げた。そして、顔を上げる。

「わたしは王龍と他国の戦いから逃げるつもりはありません。わたしはこれから朱を名乗り、そしてこの体を有効活用させてもらいます」

「向かう先は」

これはオウリュウとの約束で。

コトリを守ると誓ったあの日から、決して譲れない条件。

「――――――誰よりも早くシーグルへ」

「「了解した」」

二つの声が揃い、ソウマは立ち上がる。トリコは初めて他人の強さを感じた。

（コトリ。）

日差しがいつものように差し込む廊下でトリコは丸く白い太陽を見つめた。灰色と白。その視界に蠢く物を判断するのは相当に力を消耗した。

（いい加減、慣れなければ……。）

トリコの世界の中にだけ白い太陽が２つ存在した。自然に昇る人々を痛めつけるほどの太陽と力を持たない人工的に作られ、計算された太陽。

（きんいろ……あのときも。）

オウリュウと同じ世界で最後に見たのは金色の洪水だった。

闇は一瞬のうちに金色に埋め尽くされた。まるでトリコの存在を知っていたかのようにその波はトリコを避けて押し寄せた。

（あれは、シーグル四位部隊の誰かが作り、流した情報の波。）

それだけは確信できた。

それにより、王龍はおろか、ベータ、アルファでさえもあの空間に少しでも接触していた国は壊滅状態に追い込まれた。それまでは圧倒的に優位に立っていたのに。

（ほんの数分……数十秒で。）

恐ろしい速さでシーグルの作った金色の波は駆け抜けていった。

その金色の世界に一瞬でも目を奪われた。

あれからトリコを取り囲んでいたオンラインの声はひとつも聞こえない。以前と変わらず、人の声しか聞こえなかった。

（あれを抜けなければシーグルには行けない。）

タカツキが言うこの国の最強は『無彩の王』であり、『トリコ』だ。

（わたしがひとりであれを突破する……。）

力の入らない手のひらを頭の中で握りしめた。身震い、そして緊張。すべては畏怖の念と共にトリコの体を蝕む。

（まだ……始まったばかりなのに。負けては、いけない。）

言い聞かせ、ずっと見つめていた人工的な太陽から視線を外した。

（ひとりじゃない。）

「……、リコちゃん、トリコちゃん？」

「どうかしたのか」

図書館で会うときのようにソウマは柔らかく微笑んだ。

（しかし……まさかソウマさんが『阿』とは。意外に近くに存在するものなんですね。）

「なにかついてるかな？」

「あの」

「うん」

「……せめて『吽』ではなく、本当に『阿』なんですか……」

疑うように言うとシッコクは噴出す寸前で口に手を当て止める。それでも小刻みに肩が震えているのが明らかにわかった。

「え、なんで」

「確かに見た目だけじゃ、どちらかというと英知を司る『吽』だな。たまに抜けてると評判だが」

「……失礼な。こっちは図書館のひとってみなさんにイメージをつけるのに必死だというのに」

「その様子だと『阿』を返納して図書館付けになったんだろ。おれさえも知らなかったぐらいだし。おかげで本気出してお前を殺すところだった」

「物騒だね。『阿』を返納してたからこれはなかったの。血まみれになった時点で気付いてよ」

非難の声もやたら血生臭い。トリコはさらにいぶかしげにソウマを見つめた。

「『阿吽』もおれと同じように帝しか知らないんだろ」

「……そうだよ」

「だったら抜けてるって評判は必要ないだろ」

シッコクは言い切り、ソウマは頬を膨らませてシッコクを睨みつける。そんなふたりをトリコは並べ見て余計に疑惑を膨らませた。

「そんなに見られたら穴があいちゃうよ、トリコちゃん」

そう言われて、先に頬を染めるのはトリコのほうだ。

「ソウマさん！」

「ん？」

決心して口を開いた。

「絶対、『阿』じゃないです。間違って拝命したんじゃないですか！？」

今度こそシッコクは噴出した。

「くっ、あはははははっ！」

ソウマがいつも崩さない柔らかな笑顔を引きつらせていたのはいうまでもなく。

「だから『阿』だって。できるのなら帝に直接言ってもらいたいぐらいだよ……」

そんな呟きはシッコクの豪快な笑い声に掻き消された。

ソウマとシッコク、一気にふたりの用心棒を無償で手に入れた女将は何もいうことなくトリコの滞在を許した。

トリコはソウマに自室へ連れてきてもらうと、自分で壊した障子の穴から丸々と見える本物の金色の月と人工的な臙脂色の月を眺めた。

「トリコちゃん？」

「色彩があまり明確でないので、ふたつとも白い月に見えますが……昔、よくコトリとふたりであの月はわたしたちみたいだねと話をしたものです」

（死んだわけではない。）

シッコクが餌食になった置屋の飲み会の居間から華やかな笑い声が微かに聞こえる。

「コトリは生きている」

そう確信できるのは、いまだに喪失感さえ浮かばない片割れの存在。

「どんな姿になろうとも、生きているのです。だからわたしはコト

リの元へ」

「……ひとつ、聞いてもいいかな」

ソウマも隣に座る。

白衣から着替えたソウマは藍色の着物を羽織り、月明かりに照らされたトリコの隣に胡坐をかく。どうやらお酒に強いらしい。相当、姐さんにのまされていたようだが、ケロッとして月を眺めた。

（……なんでもこなすひとなんだ。）

妙に納得してトリコは返事をする。

「はい。答えられることであるなら」

「なぜ、そんなにコトリにこだわるのかな。きみのたったひとりの血の繋がった姉妹だということはわかるけれど、自分を犠牲にしてまで、なぜ？」

「ソウマさんは兄弟はいらっしゃらないんですか？」

「うん。まあ、近所にすっごく生意気な同じ歳がいたからね。まったく寂しい思いはしなかった。ま、今でも困り者だけど」

苦笑いするソウマの様子にトリコはいつもより柔らかく微笑む。

「トリコちゃんでもそんな笑い方するんだね」

「そんなに怖い顔してますか？」

「……たまに？」

トリコは眉間に皺を寄せ、首を傾げる。

「ごめん、ごめん。なんていうか……寂しい？っていう笑い顔。いつもコロコロ笑うのはきみじゃないから」

断言されてトリコは目を丸くする。

「わかってないとでも？」

「いえ、そこまでは」

「正直さんだねぇ……きみの隠していることは僕の知ってる困り者にも共通するところがあるからね。結構、敏感にできてるんだ。こうみえても？」

ふっと笑い、ソウマはスラリと長い刀を掴み月明かりに持ち上げる。

「『阿』っていうのはコレの名前なんだ」

「……刀」

「うん。一番互いに知っていなければいけないのに、物言わぬ僕らは一番遠いところにいる。なんでもわかりあえれば簡単なんだろうけれど。なんせ僕の相手は刀だからね」

「……それでも」

「そう。それでも。『阿』は僕で、この時代には僕でなければいけないんだ」

ソウマはそう言って刀を近くに置き、トリコに振り返る。

「わたしは……」

トリコはそっと目を伏せる。

『泣かないで――――――――！！！』

悲痛な叫び声。

それは同じ声で。

枯れるまで流れ続けるその涙を。

涙は同じだけ流れていたはずなのに。

あれは――――――――。

白い月を見上げた。

「わたしはコトリから母を奪ったのです」

零した言葉は悲痛な叫び声を思い出させた。

「わたしがあのとき、逃げていれば、母は死ななくてすんだでしょう。コトリから母を奪うことはなかった」

小さな華街で、慎ましく暮らしていた母と娘、その家族はあの一瞬に消えてしまった。

店に通っていた母はいつも出かける前に必ずコトリとトリコを抱いて「いってきます」と言って。眠れなくて起きると不器用な手つきで着物を縫っていてくれて。

怖い夢を見ると必ず手を握ってくれて、つられるように泣いて起きたコトリを抱きしめて、言葉のわからない子守唄を寝付くまで歌ってくれた。

優しく強く、母は美しかった。

あのとき。もし。

「わたしがあのとき、母に忘れ物を届けようと夜街に出ていなければ」

顔を覆えば見えなくなるのならとっくにそうしていた。

あれは夢ではない。

だからこそ、毎日、毎日。

「母はわたしをかばって死んだのです」

目を閉じても、開けても。

世界は赤い。

「あんなに注意されていたのに。コトリが行くと言い出したので、わたしがかわりに出かけたのです。それでもコトリは後ろについてきていました。あと少しで母のいる置屋というところで――――――」

ふわりと体を華奢でそれでも大きな体が覆う。

『藍色』、それはトリコにも判別できて。

「ソウマ、さん？」

「ごめん……、トリコちゃん」

心地よい心音がトリコを包んでいた。

「それは――――――」

何かを言いかけて、そして少し驚いたようにソウマはトリコをそ

っと抱き直す。

「寝て、る……」

ソウマは胸を撫で下ろし、小さく息を吐く。そして心地よい定期的な寝息をたてながら体を預けるトリコをそっと抱き直し、布団に横たわらせる。

まだあどけなさの残る顔、小さな体。とても今まで起こったことを身に受けて正常でいられるとは思えないほど華奢な体躯。

ソウマは艶やかなトリコの黒髪をそっと撫ぜる。

「それは、きみのせいじゃないよ。トリコ」

ソウマはそう言って、さっきまでトリコが見ていた白い二つの月を見上げた。

夜が開けるまでトリコの動かない手を握って。

16．箱庭のカナリヤ

なにか変わってしまっただろうか。
その時は、長かっただろうか。
……それとも。

王龍は何も変わらず、そして常に他国の戦況から目を離さずに年月を重ねた。
そして、シーグルも。新しく『声』になった者は相変わらずの力でシーグルを守っている。

『シーグルはどうだ』
薄暗い部屋にいつか聞いた声が響く。

『我々は先の戦いで大きな損失を被った』
何箇所かに置かれた蝋燭の橙が揺れる。

『しかし、得たものもある』

『われらの主は目覚められた。8年前のあのときを境にして、主は我らの国の主となられたのだ』

『同志よ。朱のもとに集まりし同志たちよ』
五番目の声は変わらずその場を引き締めた。

『タカツキ、あれはどうだね。無彩は。次はちゃんと働けるんだろうな？先の戦いのように無力では困る。あれを作り上げるために我々も無償とはいかなかった』

白衣、タカツキは以前よりこけた顔で暗闇に浮かびあがる。けれどその眼鏡もその奥の瞳も、鋭い獲物を狙うものの視線を変わらず向けていた。

「もちろん。この８年。ただすごしてきたわけではありません。それに、８年前、確かに私たちはメインサーバ『オウリュウ』を失いました。だが、被害はアルファほどではなかった。そして、あれは……」

いやらしいくらいに笑った。

「あれはあのときのオウリュウよりも遥かに強く、そして美しくなった」

空気が振動し、そして火が揺れる。

「我らの主が目覚めた。そして兵器もまた揃いましたよ」

『わかった。では情報を告げよう』

『シーグルの声が病に倒れたという情報が入った』

ザワリと空気が揺れた。

けれど、どれも歓喜に満ち溢れたもので。

『時が動き出すだろう。我々は最後の戦いに出向くとしよう』

蝋燭が一本ずつ消えていき、最後の橙が消え、部屋が暗くなると同時に衣擦れの音も消えていた。
無音の中で部屋は閉ざされた。

白粉、香。

色鮮やかな着物を纏った若い少女たちが一列に並んで大通りを行く。
美山華街で毎年、春に行われる行事のひとつで、数十軒存在する美山の各置屋から代表のひとりが大通りを並んで歩く。艶やかに美しく。
美山の外からも集まる観衆は目の前を優雅に通りすぎる彼女たちに感嘆のため息をつき、うっとりとその様を見つめた。
最後尾、彼女もまた例外ではない。

すそ引きの着物を羽織って長い黒髪を背に揺らしながら歩く。その横を藍色の着物を羽織った背が高く華奢な青年が少女の手を引きながら歩いた。

「転ばないでね、トリコちゃん」
コソリと言う。感嘆の声を上げる両端の客には聞こえるはずもなく。

「大丈夫です」

「何もないところでいきなり転ぶんだもん、さすがにびっくり」
言われて「すみません、けれど去年のことです。それに」言い返す。

「ソウマさんがいてくださるから、強打することはないでしょう？」

トリコは、大通りの両端にひしめき合う観衆みなの視線を一身に浴び、そしてコロコロと鈴の音のように笑った。隣を歩くソウマは「やられた」いいつつ、楽しそうにそれを受ける。
さらに感嘆の声が増した。
毎年、この行列行事の最後尾でこのような話が行われているなど観衆の誰もが思っていない。トリコは艶やかな朱色の着物に身を纏い、大通りを華やかにそれでも儚い雰囲気そのままに歩ききる。

トリコはいつもの濃紺の着物を羽織るとやっと自室でくつろぐことを許される。
「さすがに、慣れないことは疲れますね」
トリコに温かいお茶を渡し、シッコクは憮然とした表情で部屋の片隅に腰を下ろした。

「来年こそは違う姐さんにやってもらえ。王龍の朱がこんなことをやるなんて前代未聞だ」

そうは言うものの、真意はそこではなくやはり昨年、激しく顔面から強打したことによるらしい。シッコクも「今年は無事だな」付け加える。

「そうですね」

トリコは苦笑いし、お茶をすすった。

８年。

その間にキヨハルが置屋を仕切るようになっていた。１６歳になったトリコは姐さんたちが出払ってしまいどうしても人員が足りないときだけ座敷に上がるようになっていた。とはいえ、両腕は相変わらず動かず色覚もかなり限定される。姐さんたちがいない間のつなぎとしてだけ話し相手として座った。コロコロと笑って話をあわせて場をつなぐ。トリコはそんな仕事も嫌いじゃないと思う。

（あの世界にいるよりは。）

心の中で付け加え、開いた障子の隙間から薄っすらと暗くなった空を見上げる。

「８年か」

呟きは背後で同じように空を見上げていた黒衣のシッコクから上がった。

コトリはいまだ消息不明だ。そしてリクオウも。

たったひとつ、判明しているのはリクオウが率いた部隊がシーグルの四位軍と応戦していたという事実。リクオウの部隊はいまだだれひとりとして戻らない。

（……でも、コトリは生きている）

８年。

自分の感覚だけを確信に、トリコは特異な世界の中でシーグルへ向かった。王龍のメインサーバ、オウリュウは８年前に返されたバ

グの波により元の姿に戻ることはなかった。
オウリュウもまたシーグルへ行ったあのまま、戻らない。

「トリコ」

「8年は……」
シッコクの名前は結局『シッコク』のままだ。いくらでもそれを知る機会はあるが、トリコにとって初めて会ったあの日から『シッコク』以外の何者でもない。
黒衣の彼は『シッコク』だからこそまだここに、トリコの隣に存在する。

「たくさんの新しいものを得ました。けれど、わたしがわたしとしてここに存在するために必要なものをなくした気がします」

「コトリのことか」
頷き、口を開く。

「そしてオウリュウも」
オウリュウが存在したときに目まぐるしく話しかけてきていた、たくさんの情報たちは8年前オウリュウがいなくなったときから静かなままだ。

それでも。
この両腕と引き換えにした力は消えない。

「トリコ？」

そして。

（――――――キツネ）
キヨハルの元へさえも来なくなったキツネ。
キツネの情報を求めずにいた。求めてしまったら何かが変わってしまいそうで、怖かった。
（いまさら、何を恐れているのかわからないけれど……）
出会い、いまのトリコ場所を完璧に位置付けた。キツネが『朱』と呼ばなければ、あのときコトリを王龍の片翼になると予言しなければ、いまとは違う未来が待っていた。
それが幸か不幸か。
「わかりませんが」
「トリコ？」
「8年はコトリの不在を思い知らされるには長すぎました。けれどこの体にとっての8年は短かったです」
ふわりと微笑み、シッコクの顔を見る前に置屋からキヨハルの声が掛かる。
「呼ばれていますね」
キョトンとしてトリコは首を傾げる。
「シッコク、すみません」
そういうが否かのうちにシッコクはトリコを支えている。
「ありがとうございます」

「いや」

（これも、８年……）

なんとなくくすぐったい気がして、誰に知られるでもなくそっと微笑んだ。

「キヨハル姐さん」

障子を開けると、変わらないキヨハルの快活なそれでいて艶やかな笑顔があってトリコはそっと息を吐いた。用事は予想通り、座敷に出ることで。

「え？」

思っても見ない言葉が付け加われた。目を丸めて返すが、キヨハルは帳簿から上体を起こし唸りながら首を傾げる。

「わたしのお客様ですか？」

障子の先に待機している黒い影がビクリと動き、二人は同時に苦笑いをする。並々ならぬ視線を感じ。

「しのぶや、だそうです」

「トリコ」

何人もの他の置屋の姐さんたちとすれ違いながら、薄暗い道をトリコはシッコクとともに歩く。いつの間にかトリコは美山で有名になっていた。置屋に身を置きながらも、体が不自由で店にも出られない。

なのに。

「指名……」
呟くように言うシッコクには間違いない戸惑いが含まれている。いままで場をつなぐことがあってもろくにお酒もつげないトリコに声がかかることはなかった。
けれど、今日の相手はトリコを指定してきた。

「わたしも驚きました」

「……どんな客なんだ？キヨハルさんはなんて」

「この腕が動かないからろくに接待もできないと、お相手には伝えてあるそうです。それでもなおわたしを指名してきた、ご奇特な方です」

「奇特ですめば……いいんだが」
その呟きにトリコは眉間に皺を寄せ、小さくため息をついた。

（まったく、同意見ですね）

お店に着くとシッコクは何か言いたそうな表情のままトリコの背中が消えるまで廊下を見続けていた。裏口に近い待機所までがシッコクが店に入れる範囲だ。どんな理由があろうともその先には足を踏み入れることはできず、シッコクもキヨハルに迷惑をかけられない状況は重々わかっているので、おとなしくトリコの帰りを待つ。

もちろん、いつもだったら。

「……気になるな」

落ち着かない。

「まったく、トリコちゃんのこととなると帝の暗殺者の見る影なしですね。不審者ですよ」

障子の扉から半身を乗り出すようにトリコが向かった廊下を見つめていたシッコクの背後、頭上から心底呆れたような声が掛かる。

「……阿」

「まあ」

区切り、ソウマはいつもの藍色の着物を揺らし、シッコクの隣に華奢な体を寄せた。

「トリコちゃんの魅力がわからないように、せっかく今日も僕の方しか見せないようにしていたのに。一体、どこの馬の骨ですか」

普段だったら絶対に見せない冷ややかな視線を廊下へ向ける。

「……ひとのこと言えないだろ。その着物の下に白衣の軍服が見えるんだが」

「……」

「軍から戻ってすぐにきたんじゃ……」

「「……」」

そんな用心棒たちの心配をよそに、多少緊張しながらトリコは障子の前に腰を下ろす。

「美山のトリコです」

「入って」

すぐに部屋の中から若い青年の返事がある。中から扉が開く。人影に顔を上げると目の前に精悍な顔つきの青年がいた。

黒い短髪に精悍な顔つき、２０歳前後だろうかまだ若い。けれどその瞳に迷いはなくトリコと同じ黒色の目は真っ直ぐにトリコを見つめていた。

「へぇ。近くで見るとお人形さんのようだね」

青年の奥から聞こえる声にはっとしてトリコは表情を美山のトリコに変える。

「遅くなりました」

「入って」

「失礼いたします」

コロコロと微笑んでトリコが入ろうとすると手を添えられた。

「あ、の」

出迎えた青年は無言で添える。

そして。

「――――――お前、」

「え？」

微量な戸惑いを含む、声。

「セイシ、ひとりじめはよくないなぁ」

さらに上から被る人影にトリコは顔を上げる。

（どう考えても、あなたの方が人形のような……）

背はスラリと高く、柔らかい金色の髪。すっと目の前の精悍な顔つきの黒髪の青年が、わずかに頭を下げるところを見ると、どうやら奥から出てきたこちらの青年の方が『上司』であるらしい。

（遊び仲間、には見えませんね。それにこの髪の色は……）

トリコは成り行きを見守る。

「サネ、ツグ……さま。中に」

「うん」

（黒い髪の方が『セイシ』。こっちのキツネ似の方が『サネツグ』）

偽名だろうと関係ない。トリコは何度か復唱しコロコロと笑い顔を向けた。

（異国の、者）
心の中でそう付け加えて。
たまに美山には異国の者がいることがある。難民であったり、不法侵入者であったりそれぞれだ。この町は異国の者が混ざるには最適で、髪の色を黒くしてしまえさえすれば、軍にも監視官にもばれずに生き抜くことができる。
だが、目の前の青年たちは違う。
（密偵……が、こんなに堂々としているわけはないし。国賓……にしても、王龍軍の気配がない）
一応、王龍の一般人が切るような藍色やクリーム色の落ち着いた着物を羽織ってはいる。
（しかし……セイシ、さんは袖と裾がずいぶん邪魔そうに歩きますね……）
その所作は着なれていないのがバレバレだ。手は添えられたままだが、自分の力で立ち上がると部屋の中に入る。セイシ、がそのまま手を引くような態勢で座敷の机に案内し、そしてトリコが席に着くのを待って、トリコとサネツグの間に正座した。
そしてサネツグにセイシが酒を注ぐ。
（一応、わたしができないことはわかっているんですね）
そうなると、そう思う。
「不思議そうな顔してるねー」
サネツグがそう言うと、セイシが振り返った。
（無表情なひと……）

トリコは合った視線をサネツグの方へそっと移し、いつものように華やかな微笑みを向けた。

「失礼いたしました。本日はご指名いただきましてありがとうございます。実はわたくしご指名をいただけることは初めてでございまして」

「その腕のせい？」

「ええ」

サネツグは目を細めて微笑みながらも配慮もなく言葉をかける。配慮もないけれど、トリコは言葉をすぐに返した。タイミングよく笑顔も付け加える。

（――――――キツネに似てますね）

トリコは誰にも知られないのなら、いますぐ眉間に皺をよせ、溜息をつきたいくらいだった。

どう見てもこの二人のお客は、ただの客ではない。

（……いざとなったらシッコクでも呼びましょうか。キヨ姐さんに申し訳ないですが）

「この腕はお客様にお酒をおつぎすることもできません」

「そうだね。まあセイシがやるから大丈夫」

（……セイシさんもお気の毒な気が……）

「今日は美山の一番の華に聞きたいことがあってねー」

ふいに重要な言葉がかけられる。あまりに会話に溶け込んでいて耳を通り抜けるところだったのをトリコは慌てて引き戻す。

「聞きたいことですか？」

不思議そうな顔をしてみる。一応、「何もわかりません。」そんな表情を作りつつ。

同時に。

トリコは両腕に指示を送った。

（しのぶや、生きてる回線があったはず）

サネツグに意識を向けながらも、神経を研ぎ澄ませる。

――――――――リン――――――――

どこかで鈴の音が鳴った。

（オンライン）

「今日、見た中できみが一番、美しかった」

サネツグはそう言うけれど、そこに感情はひとつもこもっていないようだった。

「行列を見にいらっしゃったんですね」

「そう。きみがすでに判断しているように、僕たちはこの国の人間じゃないからね」

サラリ。
甘い声は真意をつく。
「シ……サネツグさまっ」
慌てたのはセイシの方で。
驚いたのはトリコの方で。
「どうせすぐばれるってば。僕の髪の色はこの国に存在しないからねー」

（なんか）
無表情だが、どこか慌てている感じのセイシととんでもないことを次々と繰り出す上司、サネツグ。
トリコは緊張を緩めて笑った。
「ふっ……変わった方ですね」
けれど。
次に驚いたように目を丸めたのはサネツグの方で。
見つめていたのはセイシの方で。
「美山のカナリヤ。僕らとともにくるかい？」

不意にかけられた真意とも冗談とも受け取れるような言葉。それにさらに慌てたのは。

「サネツグさまっ！！！！！」

セイシだけだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2696m/

ハガネの蝶

2011年5月27日12時02分発行